第５９回全国国際教育研究大会関東合同大会

大会テーマ

これからの国際交流の在り方について考えよう

会　　期	令和４年８月１８日（木）から８月１９日（金）まで
会　　場	JICA 地球ひろば（東京都新宿区市谷本村町１０−５ JICA 市ヶ谷ビル）
主　　催	全国国際教育研究協議会
共　　催	独立行政法人国際協力機構 特定非営利活動法人全国国際教育協会 関東甲信越静地区高等学校国際教育研究協議会
主　　管	千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会
後　　援	外務省　　文部科学省　　独立行政法人国際交流基金 一般財団法人日本国際協力センター　　公益社団法人青年海外協力協会 関東甲信越静地区各都県教育委員会（予定）

目　次

開催要項

大会要項

第１日　大会日程

第２日　大会日程

第４２回高校生英語弁論大会開催要項　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第２２回高校生日本語弁論大会開催要項　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

出　場　者　一　覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第４２回高校生英語弁論大会原稿　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第２２回高校生日本語弁論大会原稿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第１１回国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会発表原稿　・・・・・・・・・・・・・・・・・

教職員による研究発表紹介　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

記念講演　講師紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

来賓　大会役員　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

開　催　要　項

第５９回全国国際教育研究大会関東合同大会

「これからの国際交流の在り方について考えよう」

1　大会趣旨

2020 年にコロナウィルスが全世界を震撼させてから、丸 2 年が経過しました。マスクの着用に始まり、ソーシャルディスタンス、緊急事態宣言にワクチン接種、コロナ以前では考えられなかった様々な出来事が起こり、世界の常識はガラリと変わってしまいました。特に学校現場では一斉休校となり、緊急事態宣言の発令により文化祭や修学旅行、部活動の実施が大きく制限されることとなりました。とりわけ、海外姉妹校との交流行事は軒並み中止となり、多くの高校生が残念な思いをすることとなってしまいました。しかし、“With コロナ“のライフスタイルも 2 年目に突入し、対面での交流はできなくとも ZOOM やインターネット、SNS を駆使して、コミュニケーションの灯を絶やさぬよう頑張っている多くの学校の取り組みが耳に届くようになりました。

若者に人気を誇る、とあるダンスボーカルユニットが国際連合でのスピーチで、10 代 20 代の若者のことを「ウェルカムジェネレーション」と表現したように、若い世代は、環境や変化に適応する能力に満ち溢れています。コロナウィルスが完全に収束していない中で、どのような形で国際交流ができるのか。全国の高校生たちは、何を考え、どのような取り組みをしているのか。先生方は、どのような形で高校生を見守り、どんな創意工夫をされているのか。

With コロナからポストコロナの時代に突入するにあたり、我々にはどのような可能性があるのか。数々の国際交流活動の拠点となってきた、ここ「JICA 地球ひろば」で、これからの国際交流の在り方について考えてみましょう。

2　主催　　全国国際教育研究協議会

3　共催　　独立行政法人国際協力機構　　特定非営利活動法人全国国際教育協会
関東甲信越静地区高等学校国際教育研究協議会

4　主管　　千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会

5　後援　　外務省　　文部科学省　　独立行政法人国際交流基金
一般財団法人日本国際協力センター　　公益社団法人青年海外協力協会
関東甲信越静地区各都県教育委員会（予定）

6　会期　　令和 4 年 8 月 18 日（木）から 8 月 19 日（金）まで

7　会場　　JICA 地球ひろば（東京都新宿区市谷本村町 10-5 JICA 市ヶ谷ビル）
℡ 03-3269-2911

8　参加対象　　全国国際教育研究協議会加盟校の教職員および生徒
第 59 回全国国際教育研究大会関東合同大会に出場する生徒・引率者および保護者
国際教育（開発教育・国際理解教育等）に関心のある教職員・生徒・保護者等
国際教育（開発教育・国際理解教育等）に関わる関係団体・企業等の担当者等
国際ボランティア等に関係する教職員・生徒・担当者等

９　大会日程

第１日　８月１８日（木）

９：００～　役員集合・ZOOM 接続確認

１０：００～１０：３０　開会行事

開式のことば

主催者挨拶　大会会長　西野　孝（千葉県立流山おおたかの森高等学校長）
全国国際教育研究協議会会長
中里　真一（東京都立北豊島工業高等学校長）

共催者挨拶　独立行政法人国際協力機構
JICA 地球ひろば所長
竹田　幸子　様

来賓挨拶　外務省国際協力局　審議官
日下部　英紀　様
文部科学省初等中等教育局教育課程課及び
情報教育・外国語教育課　教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター
教育課程調査官・学力調査官
富髙　雅代　様
東京都教育委員会

来賓紹介　大会副会長　西尾　匡道（千葉県立佐原白楊高等学校長）

功労者表彰　前　和歌山県国際教育研究協議会事務局長
談儀　善弘　様
奈良県高等学校国際教育研究協議会事務局長
前田　忠彦　様
愛知県立津島高等学校　伊藤　和明　様

閉式のことば

諸連絡　関東合同大会事務局長　玉置　瞬（千葉県柏市立柏高等学校教諭）

１０：３０～１０：４０　休憩

１０：４０～１２：００　第４２回高校生英語弁論大会

開会のことば
審査員紹介　茨城県立竹園高等学校　川村　始子　先生
審査基準説明
弁論発表　　英語弁論発表者９名
閉会のことば

１２：００～１３：００　昼食 / 休憩　※２F　J‘s　Café にて

１３：００～１３：５０　第２２回高校生日本語弁論大会

開会のことば
審査基準説明
弁論発表　　日本語弁論発表者５名
閉会のことば

１３：５０～１４：０５　休憩

１４：０５～１５：００　記念講演

講師紹介　大会副会長　吉成　卓（栃木県立黒磯南高等学校長）

講師　　仲佐　保　先生（シェア共同代表理事/医師）
演題　『感染症対策と国際協力』

１５：００～１５：３０　休憩（共催団体・協力団体の活動の御紹介）

１５：３０～１６：１５　表彰式

開式のことば
英語弁論大会・日本語弁論大会　講評および結果発表
英語弁論大会　　審査委員長　文部科学省　富髙　雅代　様
日本語弁論大会　審査委員長　外務省　　日下部　英紀　様
表彰
閉式のことば
諸連絡

第２日　８月１９日（金）

８：３０～　接続確認・審査員打ち合わせ

９：００～１０：５０第１１回国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会

開会のことば
審査員紹介
審査基準説明・発表順発表
研究発表　　８校による研究発表
閉会のことば

１０：５０～１１：００　休憩

１１：００～１２：００　教員による研究発表

１２：００～１２：１５　休憩

１２：１５～１２：４０　表彰式

開式のことば
生徒研究発表会　講評および結果発表
審査委員長　JICA 地球ひろば　所長　竹田　幸子　様
表彰
閉式のことば
諸連絡

１２：４０～１３：００　閉会行事

大会会長挨拶　千葉県国際教育研究部会会長　西野　孝
（千葉県立流山おおたかの森高等学校長）
次期開催県挨拶　愛媛県国際教育研究協議会会長　松永 泰　様
（愛媛県立伊予農業高等学校長）
諸連絡

MEMO

高校生英語弁論大会

高校生日本語弁論大会

第４２回　高校生英語弁論大会　開催要項

１　目的　　将来を担う高校生が、国際理解、国際交流、国際協力、国際ボランティア活動などに関する主張を英語で発表することを通して、国際教育への興味・関心を高め、国際感覚豊かな生徒の育成を目指すことを目的とする。

２　日時及び日程　令和４年８月１８日（木）

１０時００分　開会行事
（１）開会の言葉
（２）審査員紹介
（３）審査基準・審査要領説明
（４）英語弁論発表

１５時３０分　審査結果発表及び表彰
（５）講評及び表彰式
（６）閉会の言葉

３　会場　JICA 地球ひろば（東京都新宿区市谷本村町 10-5 JICA 市ヶ谷ビル）
℡ 03-3269-2911

４　大会規定

（１）弁論内容

弁論内容は、国際理解・国際交流・国際協力・国際ボランティア活動等に関するもの。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。

国際協力、国際交流などに関する生徒自身の体験（授業や部活動などで学んだことや主体的に調査研究した事柄も含む）を通じて考えたことや、地球環境や世界平和などに関して自分の考えを英語で弁論することが望ましい。在外経験や留学体験のある生徒は、その経験や感想にとどまらず、自分の経験と諸問題などと関連させた弁論を行うことが望ましい。

（２）参加資格

【英語弁論大会参加資格（以下のすべての条件を満たしていること）】
〇各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校の生徒
〇各都道府県の国際教育研究協議会及び各ブロックにおける選考会を経て選出された生徒
〇英語を母語としない生徒。在外経験は特に問わない。

（３）参加者

各ブロックの代表１名＋関東甲信越静地区より３名（２名＋開催地区代表１名）＝計９名
ただし欠員が生じた場合は、各ブロックの次点など大会事務局で調整する。

（４）弁論時間

４分３０秒以上、５分以内であること。ただし、時間に満たない場合および時間を超過した場合には減点の対象となる。

（５）審査内容

次の項目を総合して審査する。

【論旨70点】・トピックの選択（10点）・文章構成（20点）・内容の独創性（20点）・説得力（20点）

【態度15点】・姿勢・視線・熱意

【音声15点】・声の大きさ・発音・流暢さ、抑揚、リズム

（６）表彰

外務大臣賞	（１名）
文部科学大臣賞	（１名）
国際協力機構理事長賞	（１名）
国際交流基金理事長賞	（１名）
日本国際協力センター理事長賞	（１名）
全国国際教育研究協議会会長賞	（若干名）

（７）審査員　　次ページ、日本語弁論大会に同じ

外務省	日下部　英紀　様
文部科学省	富髙　雅代　様
独立行政法人国際協力機構	竹田　幸子　　様
独立行政法人国際交流基金	高橋　力丸　様
一般財団法人日本国際協力センター	増野　雄一　　様
東京都教育委員会	杉田　和也　様
神田外語大学	ヘザー　ヨーダー様（英語弁論のみ）

第２２回　高校生日本語弁論大会　開催要項

１　目的　　日本で生活している留学生たちが感じた、外国人から見た日本を率直に日本語で表現してもらうことにより、世界からの発信を受け取り、相互理解の力を培い、多文化共生のための国際相互理解を深めることを主な目的とする。

２　日時及び日程　令和４年８月１８日（木）英語弁論大会に引き続いて開催する。

１３時００分　　開会行事
（１）開会の言葉
（２）審査基準・審査要領説明
（３）英語弁論発表

１５時３０分　　審査結果発表及び表彰
（４）講評及び表彰式
（５）閉会の言葉

３　会場　　JICA 地球ひろば（東京都新宿区市谷本村町 10-5 JICA 市ヶ谷ビル）

４　大会規定

（１）弁論内容

弁論内容は、国際理解、国際協力、異文化理解、多文化共生に関すること。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。

単なる感想や異文化体験でなく、本人の体験を通して、態度や行動に変容があり、多文化共生のための国際相互理解を深める視点や地球的な視点で述べられている弁論が望ましい。

（２）参加資格

【日本語弁論大会参加資格（以下のすべての条件を満たしていること）】

〇各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校の生徒または留学生
〇各都道府県の国際教育研究協議会及び各ブロックにおける選考会を経て選出された生徒
〇加盟校に在籍する外国籍の生徒または日本語を母語としていない生徒で、在日期間が８年以内の生徒

（３）参加者

各ブロックの代表１名＋関東甲信越静地区より３名（２名＋開催地区代表１名）＝計９名
ただし欠員が生じた場合は、各ブロックの次点など大会事務局で調整する。

（４）弁論時間

４分３０秒以上、５分以内であること。ただし、時間に満たない場合および時間を超過した場合には減点の対象となる。

（５）審査内容

次の項目を総合して審査する。

【論旨７０点】・トピックの選択（10点）・文章構成（20点）・内容の独創性（20点）・説得力（20点）

【態度１５点】・姿勢・視線・熱意

【音声１５点】・声の大きさ・発音・流暢さ、抑揚、リズム

（６）表彰

外務大臣賞	（１名）
文部科学大臣賞	（１名）
国際協力機構理事長賞	（１名）
国際交流基金理事長賞	（１名）
日本国際協力センター賞	（１名）
全国国際教育研究協議会会長賞	（若干名）＊全員に賞状を出す

（７）審査員

外務省	日下部　英紀　様
文部科学省	富髙　雅代　様
独立行政法人国際協力機構（JICA）	竹田　幸子　　様
独立行政法人国際交流基金	高橋　力丸　様
一般財団法人日本国際協力センター（JICE）	増野　雄一　　様
東京都教育委員会	杉田　和也　様
神田外語大学	ヘザー　ヨーダー様（英語弁論のみ）

英語弁論大会・日本語弁論大会　出場者

部門	氏　　名	ブロック等	学校名	学年	演題
英　語	本谷　優奈 Mana Mototani	関東 （東京都）	成蹊高等学校	2	One Ship
英　語	山本　心菜 Kokona Yamamoto	関東 （茨城県）	茨城県立下妻第一高等学校	2	A Girl on a Mission
英　語	村松　梨奈 Rina Muramatsu	関東 （千葉県）	敬愛学園高等学校	3	Preserving our languages, preserving our cultural identities.
英　語	槇原　稚乃 Chino Makihara	九州 （宮崎県）	宮崎第一高等学校	1	A Simple Google Search
英　語	尹　嘉霓 Jiani Yin	東海北陸 （三重県）	三重県立伊勢高等学校	3	Refugees Can Be Empowered
英　語	北添　海翔 Kaito Kitazoe	近畿 （奈良県）	奈良県立法隆寺国際高等学校	3	Stereotypes and Discrimination
英　語	山野　絵梨香 Erika Yamano	中国 （島根県）	松徳学院高等学校	2	The Hoof beat of the Pandemic
英　語	大西　隆生 Takao Onishi	四国 （徳島県）	徳島県立徳島北高等学校	2	Accepting Diversity
英　語	髙橋　利里愛 Takahashi Lilia	東北 （宮城県）	仙台育英学園高等学校	3	Love who you are
日本語	カスバディリオ・ コロウィ・エリン	関東 （千葉県）	柏市立柏高等学校	3	変化を受け入れること
日本語	鄭（ジョン）　綵妍（チェヨン）	関東 （千葉県）	翔凜高等学校	3	日韓の食文化についての理解
日本語	カフレ・ サラスワティ	関東 （東京都）	東京都立六郷工科高等学校	2	私の夢
日本語	閔（ミン）　修奕（スヒョク）	東北 （宮城県）	仙台育英学園高等学校	2	『心から楽しむ』ことで始まる国際理解
日本語	エンフボルド・ ドゥルグーン	四国 （愛媛県）	愛媛県立松山東高等学校	2	離れた夢

One Ship

東京都　成蹊高等学校　２年　本谷優奈

The ground-shaking sounds of bombs and missiles.
The panicked screams of people running left and right.
The piercing cries of innocent children.

Ever since the end of the Beijing Olympics, the news has been flooded with news depicting the utmost ugliest nature of humanity: war. My heart sinks deeper each time I turn on the TV.
“Why does war happen…?”
I ask myself this seemingly simple yet enigmatic question.

Conflicts and arguments. These are all around us. I am definitely no exception.From when I can remember, I have had countless arguments with my sister, my parents, and my friends. Nevertheless, no one got physically hurt, and definitely no one ever lost their lives. I have practiced the method of after arguing, listening to the other side, realizing a mutual ground, and reconciling. “Talking it over” may be another way to put it. This skill is one that I have acquired through my experience of having lived in the United States, from when I was very little trying to navigate in an environment where I was the only one with a Japanese nationality. Conflicts were bound to arise from differences. And what did we do? We “talked it over”.

Although I understand it is more easily said than done, I still do wonder why some grown adults cannot practice this essential harmonizing skill that I acquired in the states. I believe that one crucial reason why some people may not be able to do this, especially pertaining to international conflicts, is because they do not care to understand that there are diverse backgrounds that lie behind each country.

At my American elementary school, I brought a rice ball covered in “nori”, black Japanese seaweed, for lunch. My other friend asked me if it was good, so I said yes and gave her one, to which she devoured it seemingly happily. I don’t know if she really thought it was that delicious, but I think that she was trying her best to respect my culture.

From little moments like these grew real understanding of the diversity of cultures and backgrounds worldwide, and ultimately real friendships. And from these friendships grew an almost instinctive repulsion for any thought of ever going to war with any of the home countries of my dear friends.

My harmonizing strategy of “talking things through” sprouted from my understanding of diverse ideas and cultures, which stemmed from invaluable overseas experience.

As a result of my childhood experiences, I would suggest to all Japanese citizens the following. Let's study more overseas and get to know the people and the cultures of the countries on the other side of the ocean. In 2017, roughly 105,000 people studied overseas in our neighboring country Korea, while roughly only 31,000 people studied overseas the same year in Japan. I think we, Japan, can do a little better than this.

Additionally, another huge merit of traveling overseas is being able to learn a variety of languages. Language. Talking. Using words for harmony. This is at the core of my message today. Conversing with mutually understandable language to people of different nationalities about one another’s thoughts: This is the first step to resolving conflicts.

During the gloomy days of COVID-19 quarantine, on Facetime, my American friends and I would talk of each of the situations in Japan and the US and lift each other up. This is not an example of us getting over an argument, but rather getting over a shared conflict together through language. From this experience, I

re-realized the true importance of having a common language with friends, and how important learning another language can bring to your life, and indirectly, the world.

Let us venture into the world. Let us learn the rich diverse cultures, the wide array of people and all languages, not only English. Let us foster friendships from not only inside the country, but across oceans. And we must not forget that after all, we are all together on one huge vessel, one ship, called planet earth.

宗教、価値観、人種など、現在様々な理由で争いが起きている。私はアメリカに８年間住んでいた。そして、今もそこでの経験が私の核となっている。異なる背景を持つ友人と築いた関係は、世界の争いを防げると思う。自分の考えていることを、違う価値観を持つ人に上手に伝えることは、争いをなくすために不可欠だ。大好きな友人をつくることが、平和への first step。本来、私たちは地球号という一つの船に乗っている地球人なのだから。

One Ship

東京都　成蹊高等学校　２年　本谷優奈

The ground-shaking sounds of bombs and missiles.
The panicked screams of people running left and right.
The piercing cries of innocent children.

Ever since the end of the Beijing Olympics, the news has been flooded with news depicting the utmost ugliest nature of humanity: war. My heart sinks deeper each time I turn on the TV.
“Why does war happen…?”
I ask myself this seemingly simple yet enigmatic question.

Conflicts and arguments. These are all around us. I am definitely no exception.From when I can remember, I have had countless arguments with my sister, my parents, and my friends. Nevertheless, no one got physically hurt, and definitely no one ever lost their lives. I have practiced the method of after arguing, listening to the other side, realizing a mutual ground, and reconciling. “Talking it over” may be another way to put it. This skill is one that I have acquired through my experience of having lived in the United States, from when I was very little trying to navigate in an environment where I was the only one with a Japanese nationality. Conflicts were bound to arise from differences. And what did we do? We “talked it over”.

Although I understand it is more easily said than done, I still do wonder why some grown adults cannot practice this essential harmonizing skill that I acquired in the states. I believe that one crucial reason why some people may not be able to do this, especially pertaining to international conflicts, is because they do not care to understand that there are diverse backgrounds that lie behind each country.

At my American elementary school, I brought a rice ball covered in “nori”, black Japanese seaweed, for lunch. My other friend asked me if it was good, so I said yes and gave her one, to which she devoured it seemingly happily. I don’t know if she really thought it was that delicious, but I think that she was trying her best to respect my culture.

From little moments like these grew real understanding of the diversity of cultures and backgrounds worldwide, and ultimately real friendships. And from these friendships grew an almost instinctive repulsion for any thought of ever going to war with any of the home countries of my dear friends.

My harmonizing strategy of “talking things through” sprouted from my understanding of diverse ideas and cultures, which stemmed from invaluable overseas experience.

As a result of my childhood experiences, I would suggest to all Japanese citizens the following. Let's study more overseas and get to know the people and the cultures of the countries on the other side of the ocean. In 2017, roughly 105,000 people studied overseas in our neighboring country Korea, while roughly only 31,000 people studied overseas the same year in Japan. I think we, Japan, can do a little better than this.

Additionally, another huge merit of traveling overseas is being able to learn a variety of languages. Language. Talking. Using words for harmony. This is at the core of my message today. Conversing with mutually understandable language to people of different nationalities about one another’s thoughts: This is the first step to resolving conflicts.

During the gloomy days of COVID-19 quarantine, on Facetime, my American friends and I would talk of each of the situations in Japan and the US and lift each other up. This is not an example of us getting over an argument, but rather getting over a shared conflict together through language. From this experience, I

re-realized the true importance of having a common language with friends, and how important learning another language can bring to your life, and indirectly, the world.

Let us venture into the world. Let us learn the rich diverse cultures, the wide array of people and all languages, not only English. Let us foster friendships from not only inside the country, but across oceans. And we must not forget that after all, we are all together on one huge vessel, one ship, called planet earth.

宗教、価値観、人種など、現在様々な理由で争いが起きている。私はアメリカに８年間住んでいた。そして、今もそこでの経験が私の核となっている。異なる背景を持つ友人と築いた関係は、世界の争いを防げると思う。自分の考えていることを、違う価値観を持つ人に上手に伝えることは、争いをなくすために不可欠だ。大好きな友人をつくることが、平和への first step。本来、私たちは地球号という一つの船に乗っている地球人なのだから。

A Girl on a Mission

茨城県　茨城県立下妻第一高等学校　２年　山本心菜

How do you usually spend your time on the weekend? I used to spend all my time playing video games online until my mother scolds me. To many people, this might seem like a waste of time, but I don't think so. Through online games, you can meet new people and connect with friends all over the world. This was my normal way of life, until one connection changed everything.

On a typical day in mid-February, I was playing a game with some friends online. I knew the friends I was playing with were from Eastern Europe, but I couldn't remember exactly where. Suddenly, one of my friends said in chat, "I have to stop playing and hide in the basement because I can hear gunshots right now." "...Gunshots?" I thought to myself. But then I remembered, my friend is from Ukraine! My other friend, who is Russian, replied, "I'm sorry for what my country is doing." It was then I realized none of this was a joke. My Ukrainian friend was truly in danger and feared for her life. From that day, I asked myself, "What can I do? Is there any way I can help my friends?"

I began reading the news every day. I researched opinions from inside and outside Ukraine. I asked myself over and over, "If I were in Ukraine, what would I want people of the world to do?" For this question, I have two answers. These are not only things we should do, but things we must do, for the sake of world peace.

First, we must pay more attention to what is happening on the battlefield and learn the true conditions there. What happens to some of us, happens to all of us. We must talk more with our friends, families, and teachers to raise awareness of the current situation. We can't all work together to help if we don't understand the issue. To understand the complexities of international conflict, we must learn more about each country's thoughts, cultures, and historical backgrounds. It's also important to express our solidarity with those embroiled in conflict. We must not let people feel alone and isolated. They need to know the world stands behind them, and we offer whatever help we can. People on the battlefield suffer greatly from traumatic experiences. They need our support now more than ever.

Second, we must not discriminate against any peoples, whether from Ukraine, Russia, or any country. There have already been two instances of

this in Japan. In Tokyo, complaints were sent to a train station because a direction board was written in Russian. In Osaka, a ballet class had to be closed because the instructor was from Russia. Even a high school student like me can see that neither the Russian language nor the Russian people around us are at fault for the invasion of Ukraine. We must remain calm and use our best judgment to remain open to all peoples and ways of life.

As a form of solidarity, I've started raising money at my school with other members of the Japan Red Cross. I've also had the opportunity to meet some high school students from Essonne, Ibaraki's friendship prefecture, in France. France has already accepted some Ukrainian students, so I plan on asking them what help they need, and forming a coalition to support them.

I'm only a high school student, so of course there are limits on what I can do. But at the very least, I'm no longer just a girl killing time by playing online games. I'm a girl on a mission.

Thank you for listening.

オンラインゲーム中にウクライナの友人が「避難する」とチャットしてきたことから、彼女が深刻な事態下にいると知る。友人のために自分にできるのは、ウクライナで本当に起きていることを自分のこととして捉え、周囲と常に共有し広めていくこと、この衝突の背景を正しく学び理解すること、ウクライナの人々を決して孤立させないことであると考える。一方で、ロシアを含むどんな国の人に対しても差別をせずに接したい。今、私には友人のために行動する使命がある。

Preserving our languages, preserving our cultural identities

千葉県　敬愛学園高等学校　３年　村松　梨奈

“Nani shitenya!” This means “what are you doing?” in the Wakayama dialect. When my mother scolds me for something, she uses this dialect. She says it unintentionally comes out of her mouth because she is from Wakayama and she had been scolded by my grandparents with the dialect. I was able to understand what my mother wanted to say with her feelings even though these words were unusual to me. When I was little, I visited my grandparents in Wakayama several times. When I listened to my grandparents talking, I understood I was at a place far away from Chiba where I lived. I absorbed the natural features and food of the land with the language. For me, the Wakayama dialect and its local culture are inextricably linked.

According to the website of SIL International, about 7,000 languages are spoken in the world and about 2,500, or more than one-third, are endangered. An endangered language is one that is likely to become extinct within the next century. Many languages are falling out of use and are being replaced by others that are more widely used in the region or nation, such as English, Spanish and Chinese. Endangered languages will become extinct when their last speaker dies. Shockingly, dozens of languages today are said to have only one native speaker left alive. In Japan, eight languages are thought to be in danger of going extinct within a few decades according to UNESCO’s “Atlas of the World’s Languages in Danger”. Among them, Ainu is in a very severe situation. Its current number of speakers is said to be only 15 people. I simply think that this is a sad thing because I believe when a language is lost many important things that accompanied it will be lost too.

How do languages become extinct? The horrors of genocide is one cause of language extinction. Far more often, however, languages become extinct when a community finds itself under pressure to integrate with a larger or more powerful group. Sometimes the speakers of an endangered tongue learn the outsiders' language in addition to their own. More often, however, the community is pressured to give up its language. I think that losing their native tongue also means losing their ethnic and cultural identity. With

globalization, a lot of things have been unified. Do you think it would be easier if that happened to language and everyone just spoke one? I don't think so. Indeed for many people it's important to know a major national or international language, but that doesn't mean they must abandon their mother tongue. Much of the cultural, spiritual, and intellectual life of a people is experienced through language. For example, we have four seasons in Japan and we have a number of words that are related to their beauty. We can't express our feelings for the different seasons using languages spoken in countries that have mild climates year round.

I want to preserve languages, although I understand it is very difficult. What I can do now is to let everyone know that many of the languages in the world are in danger of extinction. Please consider all the unique culture and ideas we will lose if these languages die.

(537words)

和歌山出身の私の母は私を叱る際に和歌山弁になる。方言や言語はその土地の風土や文化と密接に繋がっていると思う。全世界で使われている約 7000 の言語のうち、その約 3 分の 1 以上が消滅危機言語とされ、来世紀のうちに消滅すると言われている。私は言語を守りたい。言語が失われるということはそれに付随する多くの重要なものも失われるということだ。言語を守ることは私たちのアイデンティティを守ることでもある。

A Simple Google Search

宮崎県　宮崎第一高等学校　１年　槇原稚乃

Imagine you're walking through a desert. Off in the distance, you see a mountain. You come closer and realize it's not any ordinary mountain. It's colorful. You can see all the colors of the rainbow, piled high. As you come closer, you start to make out jackets, jeans, and colorful t-shirts. You then realize this mountain is made of clothes! What is this? And why is it there?

Well, first, let me take you back to the beginning of my discovery. It all started with one comment from a friend, after I asked her what she thought we could do to help people in developing countries. "Maybe a donation of old clothes would be nice?" she replied. Without thinking too much about it, I simply agreed with her and immediately went home to research how to do so. Surely, people in developing countries could benefit from clothing donations, especially from countries, like Japan, where many people have more than they need. This is when I discovered…that mountain of clothes in the desert is real!

In fact, it can be found just beyond the residential area of the Atacama Desert, which stretches across the northern part of Chile. According to AFP, a French news agency, about 59,000 tons of clothing arrives at Chilean ports each year, of which 39,000 tons end up in these so called, "desert dumps." These unwanted clothes have a vast impact on the environment, as the chemical fibers do not decompose and end up in the sand, causing soil contamination.

Of course, my search didn't stop there, and as I continued, I found that donations of used clothing have also destroyed local textile industries in developing countries. In Ghana, for example, the number of textile jobs have dropped by 80 percent over the past 25 years, and in Zambia, the number of workers in this industry went from 25,000 in the 1980s, to less than 10,000 in 2002. All of this has occurred because consumers are buying the cheap, used clothing imported from larger countries, rather than supporting their local shops.

Sadly, these are but two of the many issues surrounding clothing donation, something I had previously thought to be a positive thing. I now realize that the root cause of these problems is a general lack of awareness. If more people knew that this surplus of used clothing was causing such problems, it could prevent good-intentioned donations from turning into burdens on innocent people. If we are so caught up in the act of donating that we do not pay attention to the various issues behind it, we

could unintentionally be causing more harm than good.　I wonder, what other things are we blindly doing that may have terrible repercussions on the world and its people?

I used to think that international cooperation meant going directly to developing countries to help support education, and donating to NGOs and other organizations. However, through this experience, I now understand that true international cooperation involves, first, learning about the situation in the country you wish to help. It is only through deeper understanding of the problems, that we can learn how to best deal with them.　After all, I was one simple Google search away from unknowingly contributing to a growing problem.

If you want to help a poor country, I urge you to think twice before you act. Simply donating your old clothes or giving money to an organization may not always be the best way.　Instead, start with a Google search.　Although it may seem like a trivial thing to do, it will empower you with the knowledge you need, to shape your good intentions into good actions.　With knowledge comes strength, and with that strength, I like to think we can all make that mountain of clothing disappear, and take small, steady steps towards true international cooperation.

善意で寄付されたはずの古着が、開発途上国で土壌汚染や地元産業の衰退を引き起こしている。その根 本的な原因は、支援側の意識の低さにあると考えられる。寄付という行為に囚われ、その背景にある様々 な問題に目を向けなければ、私達は意図せずとも、途上国に害を及ぼす可能性がある。国際協力の真意と は、まず相手の国の状況を調べてみることだ。そうして得た知識があれば、真の国際協力に向けて、着実 な一歩を踏み出せるだろう。

Refugees Can Be Empowered

三重県　三重県立伊勢高等学校　３年　尹　嘉霓

Consider for just one minute, what would it be like if you had to flee your home and risk your life to seek safety and food. Putting your life in the hands of smugglers', paying your entire life savings to buy a one-way boat ticket.

Every year, over 2,000 refugees lose their lives in the Mediterranean Sea. The number of refugees globally grew to 82 million in 2021. These refugees are living in exile, in limbo.

We know that the root problem of refugee crisis is endless war and we are doing far too little to stop it. So, what can we do? We can vote against any forms of weapons support, financially or technologically. My friend and I recently turned 18, are researching which party to vote for regarding military and refugee policy. I'd encourage you all to start doing your research as well.

But in reality, conflicts have never stopped and we all know they won't be stopped that easily. But it doesn't mean that we can only sit here not taking any action. How about the 82 million refugees? We tend to have this assumption that refugees are an inevitable burden on society. It is time to reconsider the way we think about the refugee crisis. There are solutions to benefit everyone, both the host countries and refugees themselves. We should work towards this and I hope we can think about the way to do this together.

First, nowadays, more refugees live in cities than in refugee camps. That is over 60 percent of refugees globally. For sure, food, shelters, and blankets are undeniably important in the emergency phase. But looking beyond, what refugees living in urban areas really need are jobs that enable them to support themselves.

Here's an example that I learned about in my school's English club: In Uganda, refugees are given the right to work, and access to education. And the results turned out to be astonishing for both refugees and host communities. This is what I read in an article by a social scientist Alexander Betts: In the capital city, Kampala, 21 percent of refugees own a business that employs other people, and 40 percent of those employees are nationals of the host country. In other words, refugees are making jobs for citizens of the host country. We can learn from this example that when provided with not only direct aid but the right to work, refugees can be empowered.

Second, it's all about language education. I saw this news that although Japanese government is paying the full amount for Ukrainian refugees' medical care, they still hesitate to go to hospital because of the language barriers. They have said they don't know how to describe their condition and parts of their body in Japanese. You see, the language barrier is so much harder than we think.

We have this stereotype that refugees are a vulnerable population. We should abandon this. For example, among Ukrainian refugees, there are excellent engineers, architects and doctors. If we provide them language education, they definitely can lead a better life, just like how they did in their homeland. Another thing worth mentioning is that the average time in exile for a refugee is 17 years. If they have to stay this long, why don't we create a society where refugees can bring their ability fully into play by first, breaking down barriers in language?

Jobs and education.

By the time I finish my speech, another 20 people will have been forcibly displaced. The refugee crisis seems insurmountable and we still have a long way to go. But one thing that I can be sure of is that with education and jobs, refugees have the power of resilience. I'd urge all of you to be conscious of the refugee crisis, and together let's make our world a better place.

難民は一方的に支援される立場だと思われますが、実は受け入れ国にも有益です。世界的に見て、教育と雇用の機会が保障されていると、難民も社会で活躍するのが可能です。さらに、難民は受け入れ国で平均的に 17 年も滞在します。難民が長期的に生活していくなら、難民の活躍が可能な社会にしませんか。

Stereotypes and Discrimination

奈良県　奈良県立法隆寺国際高等学校　３年　北添　海翔

Since primary school, I have been playing golf and I really love it. When I was in Grade 7, I had a chance to play in a world junior tournament for golf representing Japan in America. On the second day of the tournament, I played with players from America and South Africa. After I finished playing the games, I heard a conversation among some other representatives. One player said to the other representatives " I was watching carefully how the African guy played today because I couldn't believe how well he played yesterday and as I expected, he played so poorly today. I'm certain that he cheated his score on the first day hahaha." I couldn't believe what he said and what's more inconceivable was the other representatives were all laughing at this silly remark. Can you believe this actually happened? Do you think it is acceptable to say such a thing like this? I certainly think this is inappropriate, but I couldn't speak English properly at that time so I couldn't say anything back to them. It was only anger that stayed in my mind after this incident.

A couple months after this tournament, I had to move to a school in Australia because of a family reason. The school had students from 66 countries with many international students. I made lots of friends and shared great times with them. One day when I went to a math class with my friend, two people from different classes sat at the same table. One of them started to make fun of us saying "Asians" while doing a gesture that indicates narrow eyes. I was already feeling uncomfortable, yet another guy poured salt on the wound. He knew I'm not good at math but he said to me ironically, "Teach me math smart Asian. Oh, I forgot you suck at math, I thought all Asians are smart. You're so useless." After he said these words to me, my mind went blank and I ran outside the classroom with tears in my eyes. I just couldn't stand it. Soon after, the teacher came and consoled me. She told me "They probably envied you because of how you were enjoying your school life and wanted to tease you so don't worry." I was relieved a little bit after her words but even today, I still remember how hard it was at that time I was bullied by them.

After I graduated from middle school, I had to go back to Japan again. I decided to take an entrance exam for next year and spend my three years of high school a year later than usual. Even though I made this decision, I was still afraid of going to school

thinking I might be left out because of my age. A few months after I had been to school in Japan, I decided to confess my age and my background to my friends. I had made up my mind that in the worst case scenario, I'll end my relationship with them but on the contrary, they told me, " So what? That doesn't change who you are so don't worry about it ever again." These few words saved me and I felt totally included. By accepting and understanding the diversity of all people, not only will it make our lives much enjoyable but it will also create a positive effect on the whole society. In my opinion, the significance of having diversity is that we can help each other with things we are not capable of and develop not only our creative thinking but also critical thinking. For instance, I teach English to my friends and they also teach me Japanese. By cooperating and complementing each other, we are able to learn new things from different perspectives which deepens our understanding of diversity. If the number of people who understand the importance of diversity increases, there will be a world where accepting each individuals' uniqueness is natural for everyone.

Thanks to globalization in modern society, we see a lot of people with different backgrounds of different sorts all over the world. In order to create a world without stereotypes, it is our mission to understand the differences and unique characteristics each person has. Unfortunately, there are still people who see others stereotypically and I know from my personal experience that this easily hurts people and the trauma that they experience will remain in their hearts for a long time. So I want to state in a loud voice that it is "unacceptable to see other people stereotypically and discriminate against them. " If we all managed to see other people without stereotypes and accept other people no matter what their backgrounds are, I strongly believe that we can make a world where everyone is not scared to show their own uniqueness and instead, take pride in it. It won't be long before we can see the world where everybody can hold their hands together.

私は、ゴルフの関係で、小さい頃から海外と日本を行き来する生活をしてきましたので、様々な国の人と関わる機会がありました。すぐにみんなと仲良くなれましたが、人種差別も体験しました。グローバル化が進み、世界中で様々な民族や文化背景の人々と交流することが可能になった今、お互いを知り合うことで全ての人が偏見なく幸せに暮らせる世界を創り出せると私は強く信じています。

The Hoof beat of the Pandemic

島根県　松徳学院高等学校　２年　山野絵梨香

There is a medical proverb which says, “When you hear hoofbeats, think of horses, not zebras.” Let me share with you my story. One time my classmate heard me coughing. He then jokingly said, "You know, I think you have been infected with COVID". He immediately assumed I had COVID without asking why I was coughing. This saying simply means to look for the expected cause first, rather than something out of the ordinary. Zebra is a medical slang word meaning "surprising diagnostic"; rare diseases like COVID are generally surprising when encountered. So, did you get it now?

During this pandemic, many of us tend to act like zebras by overreacting or complicating matters due to fear. Sure, it is frightening. I, like many people, have experienced loss and I’m afraid of being infected too. So I know how people feel about it. I am saddened by daily reports on the number of deaths and infections. The Coronavirus or COVID-19, has become not only a health crisis but also a global crisis. The pandemic is truly affecting our lives, our mental health, and our economies around the world. But let's look at it from another point of view. The pandemic also served as a learning opportunity for people, countries, and the world to work together and learn more about each other. This is the purpose of my speech today. What role does COVID-19 play in fostering global understanding and cooperation?

First, pandemics have taught many people to care for and understand one another. At school, we make masks and sell them to raise money for charity. Many countries have community pantries where food can be donated and given away for free to the hungry. Additionally, we learn how to keep our bodies healthy by following local government regulations, such as wearing a mask and washing our hands. We came to understand that to care for others, we must also care for ourselves.

Second, many wealthy nations have discovered how to provide a helping hand to developing nations
through the pandemic. Some rich countries are able to give out free masks, vaccines, and machineries to less privileged countries. We are learning how important it is to work together and reach out to poor people across countries.

No country can solve a pandemic alone. We learn the necessity of helping each other to survive.

Third, the pandemic has boosted international collaboration and unity. World leaders and medical professionals learn to work together and adhere to WHO recommendations to prevent the spread of infection. Experts around the world have shared knowledge and develop drugs against the virus. Globally, people are encouraged to take different steps to reduce the risk of the virus. When faced with a pandemic, the world learns to unite and share resources.

In a pandemic situation, one needs to consider both horses and zebras. There is no one-size-fits-all solution to this problem, and complicating things in our minds won't help. We need to understand and work together on simple ways to solve the pandemic, while at the same time thinking not only from an individual perspective, but also about the huge impact on the world. Despite the loss of millions of lives, I believe there is a silver lining beyond this difficult situation. During the pandemic, we have learned many good lessons about compassion, teamwork, understanding, sensitivity and caring. We must stay positive and avoid turning against each other or giving in to negativity. I have every hope that we will get through this. Therefore, the next time you hear the sound of hooves, remember to consider horses and zebras.

「馬の足音が聞こえたら、シマウマではなく馬が来たと思え」という格言がある。新型コロナウイルス感染症という新たな脅威に人々は恐怖と不安を抱いた。しかし一方では、国際理解・国際協力が強まったのではないか。我々は他人を気にかけ、豊かな国が貧しい国と協力した。そして各国の専門家たちは国際的に協働するようになった。この感染症では未知の恐怖に遭遇したが、同時に協力して困難を乗り越えるという事を再認識させてくれている。

Accepting Diversity

徳島県　徳島県立徳島北高等学校　２年　大西隆生

Imagine a place where almost everybody thinks and dreams just like everyone else, where everyone is from the same race, and where every perspective that stands out gets hammered down. Sadly, I'm not talking about a fictional place. It's my home country, Japan. Our national identity as Japanese is deeply rooted in us. Being an isolated country for over 200 years greatly limited both migration and imports in Japan. This has created a "homogenous society" of "one nation, one language, one culture, and one race. However, I think it is now high time to re-think this myth and start embracing diversity.

Did you know that Japan is not really a homogenous society? Japan has several minority communities like the Ainu and Ryūkyu people. We also have foreign residents that makeup about 2.3 percent of Japan's population. It's pretty small compared to countries like the UK, US, Australia, or Canada. Because of this, approximately 30% of foreigners experienced discrimination in Japan. So, if we want to move forward as a globalized nation, we need to be more aware of and respect people's racial and cultural differences.

How did I get interested in cultural diversity? When I was eight years old, I met a Bangladeshi couple who taught me English. And today, I'd like to share with you two great lessons I learned from them. First, they taught me not to be afraid to try something different. Once, they invited my parents and me to a dinner party with other Bangladeshi friends. At first, I was a bit hesitant to try their food because they looked new to me. Then, one of them asked me to try eating using my hands. I was a bit surprised, but because they taught me patiently and kindly, I enjoyed the experience. I realized that hand-to-mouth eating is an important tradition in many cultures worldwide, and it's often a reflection of a community's hospitality and cultural identity. Both my mind and belly got full after that dinner party. I felt like I got a new respect for and understanding of the Bangladeshi culture just by eating with them and listening to their stories.

Second, my Bangladeshi teachers taught me not to be afraid of being different. When I was younger, I was hesitant to express my ideas because of the fear of standing out, being misunderstood, or hurting others. However, my teachers taught me not to be afraid of expressing myself and to enjoy having conversations with

others. I realized that sharing ideas or opinions can widen our perspectives. Also, we were able to openly discuss our religious differences even if I am a Buddhist and they are Muslims. Through our honest conversations, I realized that our differences make us who we are, and we should be respectful of each other's differences.

My Bangladeshi teachers taught me things that contributed to who I am today. Because of them, I got more aware of cultural diversity, and I am excited to know more about other cultures, too. Of course, trying something different and understanding each other's differences are not easy tasks to do. However, I believe that the future of Japanese society depends on our ability to adapt to new realities to build an inclusive society where foreign and Japanese nationals can live together in harmony.

今日、日本では多くの外国人が差別を経験しており、異文化や外国人に対する理解はまだ深まっていない。バングラデシュ人の夫妻との交流から、私は異文化を理解するために大切なことを教わり、新しい視点を得ることができた。今後、日本が真の多文化共生社会となれるかどうかは、私たちの、他者を理解し、受け入れようとする姿勢と努力にかかっている。

Love who you are

宮城県　宮城県仙台育英学園高等学校　３年　髙橋　利里愛

When I was a sophomore in high school, I was in a single room at a camp. I asked one of the teachers “why am I by myself?”. The teacher said, “Because you are a girl.” In junior high school 2nd grade, finally I got a boy’s uniform and I started living as a boy. Since then, I have become more confident and wherever I go, I tell people, “I am transgender.” People who hear this for the first time say “What?” and then they ask me again, “Are you a girl?” I can’t count how many times I had to explain about what transgender is. Recently, the term LGBTQIA+ has become more common, but there are still many people who don't know about it.

When it was decided that I would be in a single room at the camp, a boy in my class said, “Why? We are together every day, why do we need to be separated?” It is not only me, but other students who are also questioning the decision made by the adults’ imagination. Many people come out to me in my everyday life. All of them say that they cannot tell anyone that they are different from those around them. They may not say it, but there are people near you who are not able to live their lives as they wish because of their ‘differences’.

By international standards, the understanding of diverse sexuality, in Japan, is very much still lacking. Japan is the only country in the G7 that does not recognize same-sex marriage. This is also reflected in the *Global Gender Gap Index*. Japan’s ranking in 2021 was 120th out of 156 countries. Can we still proudly say that Japan is a developed country?

My life has changed dramatically since my junior high school started teaching classes on gender diversity, so I believe that gender education is important.

Everyone should be able to be themselves from an early age. If we teach students from an early age that there are not only two kinds of people in the world, women, and men. They will recognize that this is the norm when they become adults. The first step is to not only learn about the differences between the biological sexes, but also to explore our own identities. Then we should support them in how to be themselves without being limited by their gender.

In some countries, there are circumstances where transgender children can begin treatment at an early age. As time goes by, the body becomes more and more feminine or masculine, and if they do not get treatment early, they will suffer not only from their own

discomfort, but also from the eyes of those around them. When I was in elementary school, I didn't know what transgender was, or what my options were because no one told me. We need to resolve this problem as soon as possible.　Just by providing information, children will recognize that they have a place and will be able to talk to an adult about it.

Currently, transgender students are deprived of even educational opportunities just because they are different from those around them. They aren't able to go to school due to uniforms that separate the sexes, they aren't able to take swimming lessons, they aren't treated equally by other students. If we are going to provide equal educational opportunities, our priority should be to face and solve the problems, not to turn away from them.

I am transgender. I am proud of myself as transgender. People around me accept me as transgender. Building a society that doesn't make people feel ashamed of their differences is complicated, even if it seems easy. That's why we need to increase the number of people who can recognize, understand, and accept themselves and others through 'gender education'. A world where everyone can love themselves 'as they are' starts with 'education'.

【発表要旨】

私は、自身の性同一性障害（トランスジェンダー）としての幼い時の経験や変化、そしてまだまだ日本では受け入れられていない現状をスピーチを通して伝えたい。自身の性に対して「違和感」を感じていてもカミングアウトできない人やトランスジェンダーだからという理由で平等な扱いを受けず、苦しんでいる人達が一日も早く自分の「個性」として愛せる社会になって欲しいと強く思っている。この社会の実現に向けて、私は教育の役割がとても重要だと考える。ジェンダー教育により日本だけでなく世界が、多様性を認め合うことのできる社会になるべきだと考える。

変化を受け入れること

千葉県　柏市立柏高等学校　３年　カスバディリオ　コロウィ　エリン

カルヴィンという作家が「変わることを恐れないでください。何かいいものを失うかもしれませんが、もっといいものを得るかもしれません。」と言いました。２０１９年。その時から私の人生が変わりました。家族で日本に移住することになったのです。日本は世界でもっとも素晴らしい国の一つです。多くの友達も日本にあこがれていました。私は、「転校は初めてじゃないし、新しい環境にもついていけるわ！大丈夫！」そう思いました。

ついに、日本で中学校三年生の初日がやってきました。先生やクラスメートから温かい歓迎を受けました。クラスのほとんどみんなが私と話したいと思っていました。しかし、時間が経つにつれて、日本語ができない私に、みんなは次第に興味をなくしていきました。自分の中で、猛烈な、火のように感じたモチベーションも消えてしまいました。何も理解できない中で、毎日学校に通うのは、とっても苦痛でした。

私はフィリピンではまじめな学生でした。それが突然、何も知らない、何もできない学生になりました。誰とも話せず、一人で抱え込むしかありませんでした。私は自分自身に失望していました。「学校に行きたくない、フィリピンに帰りたい！」毎日、そのことばっかり考えていました。毎朝、目が覚めた時、最初に頭に浮かぶのは、「今日は乗り切れるのか？」ということでした。

私は、変わってしまったことを受け入れることができませんでした。高い成績を出したい、無知になりたくない「昔の私」から、学校の成績をあまり気にしない、自分のやりたいことをやる「新しい私」に変わること。「とても難しいことだけど、でも、ここで頑張らないと、ずっとこのままになってしまう…。よし！」そして、私は自分を変えることを始めました。たくさんの漢字や単語を覚える代わりに趣味に集中しました。絵を描き、ゲームをし、ダンスもしました。そして、久しぶりに自由になりました。今のところ、高い成績を取れないということを、ようやく受け入れられました。

しかし、その年の１０月、高校の入学試験があると初めて知りました。「えぇ！？日本に来てから、まだ９か月なのに、日本語の面接に合格するなんてムリ！」と思いました。でも、こうも思ったのです。「今までとてもノンビリしていた。今こそ、立ち直るチャンスだ！」と。

日本語サポートの先生と母の助けを借りて、毎日練習しました。そして、合格発表を見に行くと、私の受験番号が書いてありました。母が目の前で泣きました。「大変だったけど、一生懸命練習したよね！あなたをとても誇りに思っているよ！これは、あなたが、ここ日本で素晴らしいことを成し遂げる第一歩

だよ。高校生活、がんばってね！」母が私に言いました。その言葉にはげまされ、再び、猛烈な、火のようなモチベーションを感じました。

私は、変化が解決にもなりえることに気づきました。息をつき、休憩をしなければ、精神的に疲れすぎて、日本語の面接の練習もできなかったでしょう。「変化」は私たちにとっては怖い言葉ですが、それは人生の一部であり、それから逃れることはできません。私たちがしなければならないのは、それを受け入れて、いい結果や経験を得ることです。今、私は高校生活でとても幸せです！ダンス部では振り付けを担当しています。また、私は国際教養クラスの仲間たちと一生続くと感じる友情を築きました。もう、孤独を感じません。これからもっと多くのことを成し遂げる力があります！変化を受け入れることは、私がここ日本で学んだ、最高のことだと思います。

コロナウィルスの影響で、私たちの生活にも大きな変化がありました。しかし、「新しい日常」を受け入れて、みんなもがんばっています。みなさんも、変わることを恐れないでください。何かいいものを失うかもしれませんが、もっといいものを得られるでしょう。

日韓の食文化についての理解

千葉県　翔凜高等学校高校　3年　鄭　綵妍(ジョン　チェヨン)

まず初めに、皆さんは辛いものが好きですか。 大体の韓国人は辛い味が好きで、韓国の代表的な辛いものといえばキムチやトッポギなどがあるでしょう。それに対して、隣国の日本はどうでしょうか？最近は韓流ブームの影響で辛いものを食べる人が増えているようですが、それでも刺激的な味に慣れていない人が多いと感じます。では、韓国料理はなぜ、あんなに辛いものが多いのでしょうか。それには歴史的背景があります。

韓国料理といえば、辛いものが多いというイメージが浮かびます。しかし、驚いたことに、実際、唐辛子などの辛い薬味を使う歴史はそう長くないです。17世紀の韓国では、塩は高価な物だったので、国民は塩の代わりに味付けのできる薬味として唐辛子をよく使うようになりました。以降、唐辛子を使った料理が普及し始め、今は辛い食べ物が好きな韓国人が大変多くいます。

もう一つの理由としては、韓国は全体的に日本より寒いことが挙げられます。辛いものが体を温める効果があるというのは韓国でも日本でも共通に言われていることです。冬の寒さを凌ぐ知恵のひとつとして、韓国では昔から辛い料理を食べてきたと言われています。また、最近韓国では、辛いものが苦手な人を表現する言葉が生まれるほど、辛い味のブームはさらに起こっています。一方日本では、戦国時代から安土桃山時代、江戸時代の初期にかけて、唐辛子が国内に普及し始めます。しかし、食用としての用途はむしろ近代に入ってからの話です。唐辛子が日本に入国した当初は、その辛みから毒として扱われたり、足袋に入れて霜焼け予防として使われたりしたという話もあります。そのため、日本は韓国より辛い食べ物が少ないと言われています。

次に、麺を食べる時に関するエチケットの違いです。韓国では麺を食べる際、音を立てずに静かに食べるのがマナーとされています。ですから、多くの韓国人は、周りに麺をすすって食べる人がいたら嫌がるでしょう。私も実際に、麺を食べるときはスープが飛ばないようにゆっくりと食べています。しかし、日本ではラーメンやそば、うどんなどの麺類を食べる際に音を立てるのがマナーだと聞きました。麺を食べる国は地球上で多く見られますが、その中で麺を食べる際に伝統的に音を立てて食べる文化は日本が唯一で、韓国でもわりと最近になってから現われた現象です。日本が昔から麺を音を立てて食べてきた理由について調べたら、一つ目に「おいしく食べるため」、二つ目に「料理を作ってくださった方に美味しいことを伝えるため」と書かれていました。さらに、これはお坊さんも例外ではないようです。本来、食べ物を食べる際は音を立ててはいけないお寺でも、麺を食べる日は音を立てて食べています。最初は麺をすすって食べるのが良いという話を聞いて私は不思議に思っていましたが、ちゃんとした理由を知って納得することができました。また日本の影響か、韓国のテレビ番組やラーメンのCMでも美味しさを表現するためという理由で、わざと麺をすすって食べるシーンを見る機会が増えています。それについて「美味しそう」や「食べたくなる」など人々の肯定的な反応

も多く見られます。このように、相手の文化を理解し、その良さを取り入れることが非常に大切だと思います。

韓国と日本の距離はとても近いですが、様々な文化の違いがあります。両国間の文化の違いが簡単に理解できるとは限りません。しかし、分かち合うための一番大事なポイントは「違いを理解しようとする姿勢」にあると思います。私は留学を通じ、異文化を実際に体験することができ、それが何よりも貴重な経験になっていると思います。皆さんも機会があればぜひ他の国へ行き、さまざまな文化に触れてみてください。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

「私の夢」

東京都　東京都立六郷工科高等学校　2年　カフレ・サラスワティ

みなさん、こんにちは。私は3年前にネパールのレグミから、父が働いている日本に行きました。カフレ・サラスワティと申します。サラスワティは、日本では弁財天のことです。よろしくお願いします。私のスピーチのテーマは、「私の夢」です。

私が子どものときには、色々な夢をもっていました。学校の先生、お医者さん、ダンサーです。でも今は、エンジニアになりたいです。エンジニアに興味をもったのは、日本の中学校の3年生で、「技術」の勉強をしたときです。ネパールの学校では、勉強しない科目です。日本に来たばかりのころは、日本語は全然できなかったけど、楽しかった科目はたくさんありました。「音楽」や「体育」などです。その中でもいちばん楽しかったのは、「技術」です。ものつくりは、とても楽しいと思いました。中学校を卒業して、高校に入っても、ものつくりを勉強したいと思い、工業高校を選びました。

今は、六郷工科高校のプロダクト科の2年生です。担任の先生も、プロダクト科の先生です。いろいろなことを、やさしい日本語でおしえてくれます。プリントには、ふりがなをふってくれます。プロダクト科では、色々な道具を使って、色々なものをつくります。たとえば、旋盤、手仕上げ、溶接です。今から、この3つの説明をします。旋盤は、大きな機械で、色々なバイトを使って、鉄とか色々な金属を削ることができます。手仕上げとは、手でヤスリを持って、名刺を入れる容器など色々なものをつくります。溶接は、溶接棒を使って、板に線をひいて、くっつけることです。溶接は、とても熱いので、気を付けないといけないです。この3つを、今、学校で勉強しています。プロダクト工学科の授業で、ものをつくることは、とても楽しいです。実習では、実習着を着ています。これからは、クレーンや、たまかけなど、工業の資格にも、もっとチャレンジしていきたいです。

六郷工科高校には、ネパール人の友だちは、たくさんいます。ネパール語で、話せるので、勉強のことも、進路のことも、いろいろなことを助けあっています。フィリピン人や中国人の生徒もたくさんいます。休まないで、毎日学校に行くことは、とてもだいじです。

日本語は、月曜日、火曜日、木曜日、金曜日の放課後に、勉強しています。定時制の生徒もいっしょです。IWCの先生たちが、ていねいに、やさしく教えてくれます。な形容詞、い形容詞は、きちんと使えるようになりました。受け身や使役をできるようにして、敬語もきちんと使えるようになりたいです。

高校を卒業したら、工業の専門学校でもっと、ものつくりのことを、勉強したいです。そのために、日本語をいっぱい勉強しないといけないです。だから、JLPTのＮ２に合格できるように、頑張っています。専門学校が終わったら、日本で、ものをつくる会社に入りたいです。ものつくりで、グルミの人たちにも、役立ちたいです。ものつくりの楽しさを、後輩たちにも、もっと伝えたいです。自分に自信をもって、前向きにがんばります。

最後まで聞いてくれて、ありがとうございます。

『心から楽しむ』ことで始まる国際理解

宮城県　仙台育英学園高等学校　２年　関　修奕

皆さんは現在、国際関係に１番多くの影響を与えているのは何だと思いますか？

今日は、私が国際関係に１番影響を与えていると思うモノ、『それ』がどのように差別をなくし、国際理解を深めるのか、そのことについて話したいと思います。

私は小学生の頃、兄とオーストラリアで現地の学校に通ったことがあります。その当時、私たちはアジア人というだけで遊びに入れてもらえなかったり、少し手が触れただけなのに汚いと言われたりしました。その時、私はただ国が違うという理由だけでいじめられるから、学校に行きたくないと思うくらい、毎日が憂鬱でした。そんな経験をしたからか、私は偏見から差別をしてはいけないと感じ、そのためには国際理解が必要だと強く思いました。

しかし、日本留学の前、ある友達に留学しに行くと言ったら「えっ、あんた韓国人だから日本に行ったら差別されるんじゃない？」という反応を見せる友達が多くいました。一方で、普段日本文化に関心を持っている友達たちは「良い機会だね」と話してくれました。私もアニメのおかげで日本という国自体を好きになり、アニメが日本留学を決めるきっかけを与えてくれました。このように、アニメという日本の独特な文化を通じて、私を含めた多くの国の人たちが日本に対して好感的なイメージを持ち、日本への悪い偏見がなくなってきているのではないかと思います。

そしてコロナ禍を経て、今やっと日本に来られるようになり、１番印象的だったことはK-Cultureの人気でした。日本で韓国ドラマや歌などが好きな人にたくさん出会い、韓国人だという理由で私と仲良くなりたいと言ってくれる日本人にも会いました。この数年だけでも日韓関係が悪いということは常識でしたし、私の周りにも「日本人は韓国が嫌いだ」と話す人も多かったです。でも、日本に来たことで、今まで聞いていた話と違っていることに驚きました。現在、日本ではK-Cultureの影響で、かなり韓国に対するイメージが良くなり、日本と韓国のお互いに対する心の距離が近づいているように感じます。

このような経験から、現在、国際関係に１番多くの影響を与え合っているのはアニメやアイドルのような『文化コンテンツ』ではないかと考えるようになりました。世界に目を向けて見てみても、現在、韓国のアイドルもアメリカのビルボード・チャートで１位を取り、日本の『鬼滅の刃』というアニメも世界中で流行っています。それはたぶん、他国の文化だからこそ感じられる、独特な魅力があるからなのではないかと感じています。だから、『文化コンテンツ』は言葉が通じなくても人の心を引きつける力があると考えます。そこで、お互いの国の人たちが、それぞれの文化コンテンツにもっと簡単に接することができるなら、未だに存在する国同士の偏見をきっと破ることができるのではないでしょうか。

もちろん、私たちはみんな違う国に生まれて、異なる文化の中で育ちます。ですから、お互いに関してよく分からないし、完璧に偏見を破ることは難しいかもしれません。でも、まず大切なのは、お互いの文化コンテンツを心から楽しむこと、それによって、その国の文化や歴史、言葉に興味を持ち、理解し、歩み寄ることができれば、日本と韓国だけではなく、世界中の国の偏見も破ることが必ずできると考えます。

『心から楽しむ』ことで始まる国際理解、そんな可能性が『文化コンテンツ』にはあると、私はそう信じています。

ご清聴ありがとうございました。

離れた夢

愛媛県　愛媛県立松山東高等学校　２年　エンフボルド・ドゥルグーン（ゆっこ）

皆さんこんにちは。私はゆっこです。文部科学省の「アジア架け橋プロジェクト」でモンゴルから来た留学生です。子供の時から日本で高校生になって、デザイナーになりたいと思っているモンゴルの女の子です。日本で過ごした 5 か月はあっという間でした。学校の初日、完全に新しい環境でこれからどうすればいいのかという思いで、楽しみより不安がいっぱいでした。でも日がたつにつれて新しい生活にはなれるし、いつも応援してくれる人々のおかげで、いつまでも忘れられない思い出を作ることができました。予想より沢山のことを学べた、すてきな時間でした。すばらしい人たちと出会えたことを本当に感謝しています。今日は、私が遠いモンゴルで日本に対してどんなことを考えていたか、そして日本に来てどんなことを感じたかを話そうと思います。

私が日本を好きになったのは、父の影響です。父は私が生まれる前に日本へ来たことがあります。家には日本と関係がある物や写真もたくさんあったので、子どもの時からずっと「日本に行きたい。」と思っていました。また、私の祖母は小学校の先生で、いつもモンゴルの民話や文化について話してくれました。祖母の話を聞いた後で、モンゴルと日本の似ているところと違ったところを知りたいと思うようになりました。この知りたいという思いは時間とともに大きくなって、私の夢を作り、私は今日ここにいます。

日本で過ごしてわかったことが三つあります。協力・頑張り・尊敬です。日本では活動や行事の大小にかかわらず何かをするとき、みんなが自分のすることをしっかりやって力をあわせます。とても勤勉で、楽しければもちろん、辛くても、思い通りにいかなくても今、自分に起こっている全てのことを一生懸命に頑張ろうとします。また、丁寧で礼儀正しく、相手のじゃまをしないようにと考えますし、高齢の人を尊重します。伝統を守ろうとします。日本は世界の中で技術が最も発展している国です。モンゴルにいるときは文化も自然も互いに似ているのに、なぜこんなに発展のしかたが違うのだろうと思っていました。日本に来て、その秘密は日本人にあるのだとわかりました。でも、頑張りすぎる日本人を見ると、ずっと頑張ったらできることもできなくなる、少し休憩があれば良いかなあとも思います。

中学校の時、先生が「自分の夢をノートに書いてください。そうすれば将来、その夢は必ず実現します。」と言いました。私はすぐ日本のファッションの大学を探して、そこに入学したいと書きました。高校の時、何がほしいかという質問には「日本の高校生になりたい。」と答えました。そして、日本へ行くという夢を叶えるために日本語の勉強を始めました。高校の奨学金留学を探して、毎日必死に勉強して、1320 人の中で日本へ行く 9 人のうちの 1 人になれました。みなさんはまだ叶えられなくて、遠く離れたところにあるように思える夢はありませんか？でも叶わないなんて思わず、夢のためにいっしょ前進しましょう。何日も雨が続いても、必ずまた晴れて、美しい景色が見られます！だから、夢をあきらめないで、心から望むもののために一生懸命頑張りましょう。1 年前、私が「きっと叶わない、

私にはできない」と思っていた「離れた夢」は、1年後、夢ではない現実になりましたからね。
これからも私は、日本の大学で学べるよう勉強します。日本とモンゴルの懸け橋になるよう頑張ります。
　ご静聴ありがとうございました。

dulguun enkhbold（エンフボルド・ドゥルグーン）（ゆっこ）

国際理解・国際協力に
関する生徒研究発表会

国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会　出場者

氏名	都道府県	学校名	演題
安江 有冬　柴 侑望莉 大久保 心優　石塚 小春	青森県	八戸聖ウルスラ学院高等学校	『いったい誰が悪い？技能実習生問題～地方における多文化共生を私たち高校生が担う～』
阪口 慧太　高久 曜充 アレフィンダルヴェングエン 井上 陽菜　中野 愛心 野中 美優　平田 千恵	東京都	東京都立科学技術高等学校	科技校から 11646 ㎞ ～インドとの交流を通して～
貫井 麻妃　松本 優菜 石原 匠　中井川 成人 小幡 凛　高木 太陽	東京都	東京都立五日市高等学校	地域から世界へ！「もったいない」を世界に歌で発信！五高生もったいない音楽プロジェクト
大世古 葵　岡野 高芽 稲葉 剣斗　石島 茉優	東京都	聖徳学園高等学校	聖徳学園と世界をつなぐ
三島 莉央　平田 優真 中井 美玖	兵庫県	兵庫県立太子高等学校	「おうち DE 留学」
茶畑 匠海　森川 綜太 岩本 愛生　中谷 彩那	兵庫県	兵庫県立神戸商業高等学校	「ＥＳＤで外国人が住みやすい街づくり」
富田 さくら　佐伯 にこ 日髙 花香　福澤 ひより	宮崎県	宮崎学園高等学校	Pamodzi　～このバッグてげかわいっちゃが～
氏原 麻喜　頼 美樹 藤村しおり 伊尾木 大輝 西本 怜生　山本 莉穂	高知県	高知市立高知商業高等学校	「Think Globally , Act Locally」 ～ラオスを想い、高知でできること～

□タイトル（テーマ）

『いったい誰が悪い？技能実習生問題～地方における多文化共生を私たち高校生が担う～』

□学校名

八戸聖ウルスラ学院高等学校

□発表生徒氏名

3 年安江有冬、柴侑望莉、大久保心優、2 年石塚小春

１　発表を通して伝えたいこと

地方における外国人技能実習生受け入れの現状と課題、多文化共生社会の実現に向けた私たち高校生の取り組みを伝えたい。また、外国人技能実習制度に対して、見えてきた現実の課題について伝えたい。

２　動機・課題発見

2019 年、私たちは「日本人は本当に外国人労働者にやさしいのか」をテーマに、地域における外国人技能実習生の現状や課題について調査した。そこで私たちの住む八戸市が、青森県内で技能実習生の受け入れが一番多いこと、在留外国人の国籍別割合では、中国人を抜きベトナム人が非常に増えていることなどがわかった。実際に実習生を受け入る監理団体や企業を訪問し、もはや技能実習生なしでは、農業、漁業、食品加工業や造船業などの県の産業が成り立たない現状があることがわかった。しかし、地域社会においては彼らの存在はほとんど知られておらず、彼らに対し否定的で差別的なイメージを持つ人も少なくなかった。

この現状を変えたいと考え、まず彼らと直接的な関わりを持ち、自分たちが彼らを知ることからスタートした。地方における多文化共生のために、高校生である私たちは何ができるのか。できることを実践しようと試行錯誤しながら取り組んだ 3 年間を今回の発表を通して振り返る。

３　目標・ねらい

① 多文化共生社会構築のために、地域社会における外国人技能実習生の現状を自分たちが学び、周囲に発信すること
② 現状から見えてきた課題に対し、高校生なりにアプローチし、解決の糸口になる行動をすること

４　具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等

2019 年度「日本人は本当に外国人労働者にやさしいのか」をテーマに研究

・技能実習生の受け入れに関するアンケートを実施（保護者、生徒）
・技能実習生の受け入れ監理団体や企業の訪問、アンケート実施
・技能実習生の方々との交流と日本語の会話練習（2 回）

＜研究内容を発信＞
・青森県高等学校総合文化祭　国際理解部門・研究発表部門での発表　最優秀賞
・第１回ユネスコスクール北海道・東北ブロック大会　ポスターセッション　最優秀賞

➡　青森県国際交流協会が出している県内在留外国人に関するデータなどから、概況を知るだけでなく、実際に実習生や彼らを受け入れる監理団体や企業の人々に直接会って話しをうかがうことを大切にした。学んだことを大会等で発信するだけでなく、オープンキャンパスや学院祭など同じ年代の中高生にも伝える機会を積極的に作り、地域における実習生への理解を深めてもらおうと工夫した。

2020 年度「コロナ禍における技能実習生の状況」を研究
・技能実習生の方々とのオンライン交流と日本語会話練習（5 回）
・技能実習生の方々との直接交流（1 回）
・受け入れ監理団体の方からの講演会（オンライン）
・受け入れ監理団体や企業への電話アンケート

＜研究内容の発信＞
・青森県高等学校総合文化祭　国際理解部門・研究発表部門での発表　最優秀賞
・多言語での校内図の作成、学院祭でのポスター掲示

➡　2020 年度はコロナの感染拡大により、前年度までと状況が一変し、急速に増加する実習生の受け入れがほとんどできない状況になった。その現状を調査しながら、いかに地方都市において実習生が必要不可欠な存在になっているのかがわかった。技能実習制度の本来の目的とは離れ、日本の労働力不足の問題解消に、実習生が大きく貢献していることが明白となった。私たちは、高校生としてできる交流や発信活動を続けた。特に、当時アジア高校生架け橋プロジェクト生として本校に在籍していたベトナム人留学生の力を借りながら、ベトナム語での校内図の作成を試み、多言語表示の必要性を伝える工夫を行った。

2021 年度「多文化共生のために高校生ができること」を実践
・技能実習生の方々とのオンライン交流と日本語会話練習（4 回）
・受け入れ監理団体の方とのメールでのやり取り
・八戸青年会議所主催の「災害時の異文化理解」に参加。（岩手大学の先生の講演、在住外国人の方々と、災害時の避難所運営について議論）
・本校留学生（スリランカ、タイ）との交流、留学生ポスターの作成
・八戸市在住外国人へのアンケートをチャット風にまとめ、八戸駅に掲示
・「多文化共生アンケート」を校内で実施

➡　海外からの入国制限が続いた 2021 年度だったが、実習生との日本語の会話練習をオンラインで続け、英語をほとんど話さないベトナム人技能実習生たちとのやり取りから、やさしい日本語や身振り手振りを使ったコミュニケーションの方法を学ぶことができた。より多くの地域の方々に実習生を含む在住外国人の存在について知ってもらいたいと考え、八戸市や八戸駅（JR 東日本）とのやり取りを重ね、駅構内でのポスター掲示を一定期間行うことができた。

5　成　果～研究を振り返って～

2019 年研究をスタートした際には、本校生徒への意識調査では、外国人労働者の受け入れに肯定的な意見が多く、実習生を受け入れている企業側でも日本語学習の機会や地域行事への参加を促すなど様々な工夫が見られ、日本のおもてなしの精神や受け入れをサポートする側の努力を知ることができた。

しかし一方、彼らが働く建設や漁業の現場や、高齢者の多い農業の現場では、荒っぽい言い方や方言がきついなど、彼らが学んできた日本語が通用しない場面も多くあり、言葉の壁は依然として高いことがわかった。実習生と受け入れ側、両方で努力はしているものの価値観の違いや文化的な違いもある。「違いは見ないようにしている」という企業側の本音も聞いた。

さらに、彼らは労働者という側面だけではなく、生活者としての側面もある。受け入れ企業で働く環境の工夫や努力をしていても、彼らが生活する地域住民が実習生を受け入れようとしない事例もあった。さらに、コロナの感染拡大により、顔が見える交流が難しくなり、地域において彼らの存在は以前に増して見えにくくなってしまった。

昨年度はこの状況を踏まえ、直接的な関わりが制限されることはあったものの、発信活動をはじめ、できる工夫を続けてきた。結果、部員自身が、そしてその周囲の生徒が確実に違いをもつ人々への寛容な態度を身につけることができたことがアンケートを通してわかった。また、八戸市国際交流協会や八戸青年会議所とつながり、情報を提供していただいたり、イベントに招かれたりと、実習生に関する協力関係が広がったことは大きな収穫となった。

一定の成果は得られたものの、ニュースや新聞記事では実習生への暴行事件や賃金未払いなどの事例がしばしば取り上げられているのが現状である。国連からも技能実習制度が「人権侵害」だと批判されている。過去 3 年間、実習生と関わり、研究を続けてきた私たちにも、見えてきた限界がある。それは外国人技能実習制度そのものの問題であり、国としての外国人労働者の受け入れをどう考えていくのか、まさに今、正面から向き合うときが来ていると考える。彼らにとって日本が、「訪れたい国」としてだけでなく、「住みたい国、働きたい国」として魅力ある国であり続ける工夫と努力が求められている。

6　今後の展開、展望

今後、日本にとって外国人の方々との共生は必須であり、彼らがあえて日本を選び、働きたいと思ってもらえるような国にしていくことが、私たちの国としての豊かさにつながる。経済的な豊かさのみならず、文化的、社会的な豊かさのために、高校生の私たちができることを、試行錯誤を重ねながら続けていきたい。

具体的には、実習生が入国後に日本語指導を受ける期間に、彼らの会話練習を継続して行っていく。また、八戸国際交流協会の主催する「国際交流フェスタ(9 月実施)」や「地域で育む BOSAI 力講座(外国人のための防災教室)」等のイベントの手伝いはもちろん、在住外国人の方々と地域住民の交流の場を私たちが創出する役割を担う一助となっていきたい。

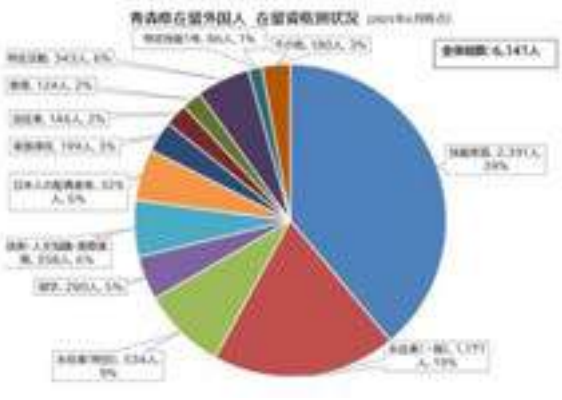
技能実習制度そのものの欠陥はあると思うが、その批判ばかりでは多文化共生社会は作れない。若者の意識や行動変革は社会変革につながる。互いの顔が見える関係が、互いにとって安心して生活できる基盤となり、それぞれの持つ違いが豊かさを生み、地域活性化を後押しする。その鍵を握る私たちでありたい。

資料１　県内在留外国人の推移

折れ線グラフの急激な伸びはベトナム人の増加

資料２　在留資格別の割合

技能実習生が約４割を占める

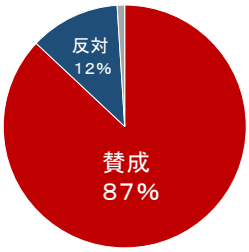


（上のグラフはいずれも青森県国際交流協会 2021 年６月データより）

資料３　外国人労働者受け入れに関するアンケート

（本校生徒・保護者を対象に実施　2019 年度）

受け入れに対する賛否



賛成の理由

- 労働者不足の解消
- 異文化交流
- 他国との関係改善

反対の理由

- 日本人の仕事が不足
- 言葉の壁
- 治安の悪化

資料４　実習生に関する調査を開始

八戸市内の実習生受け入れ監理団体や企業を訪問　（2019年）

監理団体（主にベトナム人実習生を受け入れ）

北日本造船(八戸市)

中国人技能実習生を200人受け入れている
今後はインドネシアからの受け入れも検討中

資料５　八戸駅構内でのポスター掲示（2022 年４月）新入生に市内在住外国人ついて説明する３年生

資料６　ベトナム人実習生とのオンライン交流、対面交流の様子

□ 科技校から 11646 ㎞　～インドとの交流を通して～
□ 東京都立科学技術高等学校
□ 阪口慧太　　高久曜充　　アレフィンダルヴェングエン
井上陽菜　　中野愛心　　野中美優　　平田千恵

１.発表を通して伝えたいこと

私たちの学校は、平成 13 年 4 月に科学技術教育を特色とする新しいタイプの専門高校として開校した、都立高校初の科学技術科を有する高校です。平成 19 年より 2 期にわたり「SSH（スーパーサイエンスハイスクール）」の指定を受け、令和 3 年には SSH に再指定されました。

本来は海外フィールドワークや海外修学旅行がある学校ですが、この３年実施できていません。そこで、今回は、この厳しい情勢下により、あらゆる制限で諦めることなく、むしろ新しい取り組みを始めた「国内で行う活発な国際交流」を紹介します。オンラインで繋がる国内での国際交流・国際理解について発表をします。

２.動機・課題発見

対面での国際交流の制限を受けたため、新しい交流の方法を考えました。まず、海外学校間交流は全てオンラインに切り替えました。また、交流国の１つインドの学校と、私たちの学校の近隣にあるインド系インターナショナルスクールと３校合同連携を繋げることを思いつきました。

私たちの知識や技能を使って、海外の学校との課題解決を図ろうという取り組みです。課題解決に向けた協力体制の強化を図ることは、一つの国では解決できないことでも他国の協力により達成できるのではないかと考えているからです。そこで、私たちは、国内外を含めた共同研究の構築を目指すことにしました。

３.目標・ねらい

国内外の学校と課題解決に向けた共同研究に向け、得意分野を生かしながら連携して探究活動を行い、課題発見力や課題解決能力、コミュニケーション能力を伸ばしていくことに着目しました。そこで、英語によるコミュニケーション能力を育成するため、国際的な課題にも目を向ける素地を養う事と、国内外の高校生と「地域」をテーマに国境を越えた共同研究へと発展させ、在学中に国際交流・国際研究に挑戦する事を目標としました。

４.具体的な内容及び工夫・配慮した点等

・実施日・期間

コロナによる制限があったが、年単位での活動を実施　以下、授業実践は割愛し、他校・他機関と協働で行った前年度の活動日程のみを記す。

令和 3 年 8 月 27 日(金)～8 月 31 日(月)	令和 4 年 1 月 15 日(土)
令和 3 年 10 月 26 日(火)	令和 4 年 1 月 29 日(土)

令和３年 11 月 ９日(土)	令和４年 ２月 ５日(土)
令和３年 12 月 24 日(金)	令和４年 ２月 26 日(土)
令和４年 １月 11 日(火)	令和４年 ３月 17 日(木)

・主な実施場所

［東京都立科学技術高等学校］校内

・取り組みへの参加者及び人数

４８人(増加予定)

取り組み内容

まず、英語に対する苦手意識に向き合うことからはじめました。(株)ISA 主催のエンパワーメントプログラムに参加して、３日間の英語漬けを通して、MINDSET をしていきます。（実施日①）ここで、私たちは、リーダーに必要なこと・なりたい自分像を固めていきながら、英語を話すことの抵抗を弱めていきました。

そして、そこに集まった生徒の中からさらに希望者を募り、海外および国内の生徒たちとの交流希望者を集めました。

コロナをきっかけとして、科学技術高校の近くにあるインド系のインターナショナルスクール India International School In Japan(IISJ)と交流を持ち始めることができました。インドの学校では、私たちの学校の第二分野に相当するプログラミングを使ってロボット作成をしたり感知センサープログラムを作ったりと、私たちの学校ととても相性の良い研究をしています。

また、インド本国にある科学技術に特化した学校、St.Mary School と複数回にわたりオンラインで交流を行いました。内容としては、学校紹介、東京の名所紹介、文化紹介、研究内容の相互発表会です。

交流会後の本校 STEP メンバー・吹奏楽部とインドセントメアリースクールの学生

工夫・配慮した点

・工夫した点

Web 会議システムを使用することで、国際交流事業においてはコロナ以前より活発に実施することができ、研究指導を担当する先生と国際交流担当の先生が教科を超えて連携する姿を目の当たりにしました。

しかし、いいことばかりではありませんでした。新型コロナウィルス蔓延による学級閉鎖により、発表を予定していた研究班が発表できないという事態に陥ることもありました。そのメンバーはオンライン上という利点を生かし、自宅からオンラインで参加し、交流を深めました。私や友人たちの研究活動の発展や英語力の向上、私たちの研究が、国境を越えた他の人たちに繋がる取り組みを実践してきました。

・配慮した点

学外からは JICE(一般財団法人日本国際協力センター)から講師をお招きして、インドの概要・文化・日本側の支援に関してオリエンテーションをして頂きました。英語のやりとりで難しいと感じた時には、通訳補助をして頂きました。

JICE から招いた講師の方々

発音・発声指導では、専門外部講師 Munguia 氏にお願いしました。自らが作成した発表プレゼンの原稿を、講師の先生に読んでもらい、その音声を録音して、自宅で発表練習を何度もしました。研究内容が定まっていない生徒たちは、文化交流としてお互いの学校生活や研究活動について語り合い、英語力を深める貴重な体験となりました。

オンライン上における英語のやり取りは困難な場面もありました。今年度は、時差の問題の解消をするべく、動画投稿サイトを使い、インド・台湾の学校と交流を継続していきます。

５.成果

応募段階では安易に考えていた友人たちもいましたが、国際交流に参加した全生徒が試行錯誤を重ね粘り強く交流活動を進めることができました。また、発表時には、直前まで研究資料を調整する友

人もいて、研究への意欲向上を生徒の私自身が見ても感じました。英語を使って研究発表をすることに対し、語学力の向上を図るとともに、国際的な視点で物事を考える力が付きました。そして、私たち日本とインドの交流は、国際理解・国際協力に対する意識が向上しました。このことは、国際交流プログラムに参加した生徒たちの各アンケートの結果からも顕著に現れました。

昨年度実施された東京都国際教育研究協議会主催の国際理解・国際協力に関する研究発表会で実施されたワークショップでは、将来どういった分野で活躍したいかという問いに対して、参加した科学技術高校の生徒たちのほとんどが「科学技術を通して専門的な分野で開発・援助に関する仕事がしたい」と回答しました。この結果からも、日本では起こりえないような課題が交流先のインドでは深刻化しているといったことを相互研究発表会を通して知ることができて、科学技術にかかわる共同プログラムを通して考えていきたいという気持ちになりました。

同じアジア圏でも、インドと台湾では学びの視点が異なりました。近隣かつ親日である台湾は、研究内容が似ていましたが、時差がある上に文化的な共通点も少ないインドとのやりとりや受ける教育の違いを知り、私たちの住む日本の豊かさを知りました。

発表の準備をする IISJ の生徒

物理数学班との交流

今年度に入っては、科学技術高校の科学研究部物理数学班との交流で、情報分野とは違った交流をすることができ、とても有用な時間となりました。

６.今後の展開や展望

私たちが１年の時に、都立科学技術高等学校の有志で STEP(Science Technology High School English Program)メンバーが立ち上がりました。”KENKYU at TOKYO”をテーマに、科学技術を使った研究開発を推進していくためには、引き続き“MINDSET”プログラムや海外連携校との交流をより多くの生徒に広げていく必要があると感じました。

国内の IISJ や国外の連携校と共同で実験やフィールド調査等を行うことも計画しています。地域課題発見力を磨くための調査やフィールドワークにも情勢を見ながら、連携を保ち実施していく予定です。共同研究以外にも文化交流、日本の茶華道を通した交流や昨年度同様に音楽会なども予定しています。私たちがインドのことを理解するのと同様に他国の人たちにも日本のことを理解してもらえるような活動をしていきます。

地域から世界へ！「もったいない」を世界に歌で発信！五高生もったいない音楽プロジェクト

□学校名　東京都立五日市高等学校
□発表生徒氏名　貫井　麻妃　　松本　優菜　　石原　匠　　中井川　成人　（２年）
　　小幡　凛　　高木　太陽　（１年）

１　発表を通じて伝えたいこと
今回の発表で伝えたいことは、「日本的精神である『もったいない』を世界に発信する音楽プロジェクト」です。私達の目指すゴールは、歌を通じて世界に日本の「もったいない」精神を伝えることで、SDGs の実現に向けて世界を動かす仲間を増やし、現在待ったなしの気候変動へのアクションを起こすプロジェクトを提案します。発表を通じて、このプロジェクトについてより多くの人に知ってもらい、プロジェクトの内容を深化させていきたいです。

２　実施日・期間：2021 年 9 月～現在

３　主な実施場所　都立五日市高校周辺地域

４　取り組みへの参加者及び人数
：部員 10 名、地域在住のシンガー羅久井俊介さん、シンガーソングライター山田証さん 他数名

５　課題発見・動機など
　2019 年より ESS 国際交流部が地域と連携した「外国人おもてなしプロジェクト」を通じて、課題が発見され,「もったいない音楽プロジェクト」が広まるきっかけとなりました。
　五日市高校は東京都の西部にある自然豊かな場所にあります。コロナ禍前までは、多くの外国人観光客がこの地を訪れていました。「おもてなし」を 1 つのキーワードにして、外国人観光客に五日市の魅力を発信していくことを目標に活動をしてきました。主に、以下の 4 点が挙げられます。
　(1) 地域英語マップの作成
⇒実際に地元の飲食店 20 軒ほどをインタビューし、飲食店の魅力を外国人観光客にも伝わるようなデザインの工夫をして作成。地元飲食店、観光協会、JR 五日市駅前にも置いていただきました。

　(2) 魅力発信動画の作成
⇒季節ごとの魅力発信動画を作成、You-tube に公開。また、JTB 主催の「観光甲子園」に出場し、地元の魅力ある場所を高校生が回って紹介する動画を作成しました。
　(3) 飲食店英語メニューの作成
⇒インタビューを通じて、飲食店が外国人対応に苦慮していることを知り、外国人向け英語メニューの作成を依頼された。部員で英訳し、デザインなども工夫して、観光客に好評でした。
　(4) 地域新聞街づくり通信への寄稿
⇒ESS 国際交流部の取り組みを地域新聞で定期的に掲載して頂いた。記事は生徒が執筆するが、より魅力的な記事とするために編集者とのやり取り等を通じて多くのことを学びました。

　この取り組みの成果により、多くの地域の方に五日市高校 ESS 国際交流部のことを知ってもらうようになり、様々なお

声掛けを頂くことが多くなりました。そのなかの 1 つに、地元のタウンコーディネーターから、環境保護・SDGs 等に関心のある地元のミュージシャンが高校生とコラボして世界に発信する動画や歌を作成していきたいとの話が持ち掛けられ、実施をすることになりました。

6　目標・ねらい

「もったいない」をコンセプトにした歌詞を部員間で言葉を紡ぎだして作成、Zoom 会議等で、山田さんを交えた歌詞作成ワークショップを行いながら、歌詞を洗練させていきました。作成した歌詞を元に、羅久井さんの協力を得て、曲が出来上がりました。現在、レコーディング、PV の作成等を行っています。「もったいない」の形は人それぞれであるため、多くの人にサビである「もったいない」の部分を口ずさんでもらって、1 つのミュージックビデオにしたいと思っています。

今後、これを英訳して、高校生とミュージシャンが共に演奏を行い、動画を作成し、世界に発信していくことが目標です。You-tube での発信を行い、協力者を増やし、クラウドファンディングも行うことを考えています。最終的には、世界における気候変動の現場のリアルな現場を訪問し、楽曲制作やドキュメンタリービデオの作成を行い、世界に発信できるようにします。高校生ができることは限られていますが、様々なアイディアを出し合い、歌、楽器、ダンス、映像などの様々な媒体を使って、インパクトのある動画作成を行っていきたいです。

7　具体的な取り組み内容・工夫・配慮した点

地元のミュージシャンとの出会いから、まずは楽曲を作ろうということになり、「五日市の森」をテーマに楽曲を作成し、その成果から課題発見、そして、現在のプロジェクトに至るまでの経緯を紹介します。

（1）地元のミュージシャンと連携して ESS 国際交流部作詞作曲の “The 森”を作成

⇒五日市周辺の森や川を、清掃活動をしながら歩き、魅力を考えて、「東京の森」を題材とした ESS 国際交流部が作詞作曲した「the 森」という曲を作成し、地元の協力者である羅久井俊介さんとレコーディングし、文化祭や You-tube 等で発信しました。しかし、この曲を世界に発信するために英訳しようとしたときに、何を訴えかける歌になるのかという課題が部員間であがってきました。

（2）歌のコンセプトである「もったいない」の定義を定める

⇒世界に発信するために歌のコンセプトをきちんと定めた方が良いということになり、世界に広めたい日本的精神である「もったいない」というアイディアが出てきました。「もったいない」は人によって定義が異なるのではないかと考え、言葉の定義を高校生で話し合って考えるとともに、SNS でもアンケート調査を行いました。主に、人々の関心がある項目は、以下の 3 点でした。

①食べ残し：本当に必要なものかどうかをしっかり考えてから購入し、苦手な食べ物を少しでもいいから挑戦してみるなど食べきる工夫をしてみることが大切であること

②使えないと思っていたものが使えるということ：普段使えないと思って捨てていたお米のとぎ汁は、お皿に付着した油を落とすことができる

③使えるものは捨てずに使いきる工夫をして再利用できるということ：私たちが普段使っている鉛筆や消しゴムなどを最後まで使いきることも大切である

このうち、高校生が「自分事」とし、歌詞で伝えていきたい「もったいない精神」を話し合い、③に焦点を定めて、歌詞を作成することになりました。

（4）キーパーソンとのコラボ・「もったいない」精神を世界に伝える作詞作曲、動画の作成

⇒翻訳できない日本的精神である「もったいない」をコンセプトに、日本語でアイディアを出して、「森のシンガーソングライター」である山田証さん、地域のミュージシャン羅久井俊介さんを中心とするミューシャン数十名と連携して、Zoom 会議等を行い、歌詞を作成しています。高校生がアイ

ディアを歌詞で発表し、ミュージシャンがそれにアドバイスを加えて歌詞を洗練させていく活動を行っています。作成した歌詞は以下の通りです。今後、部員とミュージシャンで歌ってレコーディング、これに合わせて地域の森や川を歩いてミュージックビデオを作成していきます。

～現段階での歌詞～　※ 今後、改良していきます

何がもったいないか、考えてみよう
自分自身に　問いかけてみよう
深く考えず　簡単に
探してみよう　もったいないを
その洋服　まだ着れるよね？
その文房具　まだ使えるよね？
工夫しよう　無駄遣いしないように
Yes! Japanese-Only words
***もったいない　もったいない*　※ここで、何通りもの「もったいない」の動画を見せる。
もったいないと思うことのない　世界を描こう
もったいない　諦めない
少しの工夫で変わるはずだから　感謝しよう
*もったいない　もったいない***

その雑草だって　いいとこあるよね
誰でもいいとこ　絶対あるよね
見つけよう　いろんないいところ
Yes! Japanese-Only words
＊＊（繰り返し）
Reduce モノを大切に使用　　Reuse 繰り返し使おう　　Recycle モノを再利用
自分たちにできること１つ１つを大切に　もったいない　もったいない

この歌詞の「もったいない」に全国各地、世界各国の人に動画で登場してもらいたいと思っています。動画出演 OK の人がいれば、会場で「もったいない」と歌詞に沿って口ずさむ場面を動画で撮らせていただきたいので、お声掛けください！

（5）FSC アワード ジュニアアンバサダーとしての取り組み

⇒日本の森の良さを世界に伝え、気候変動をもたらさないような森林保護の活動も行っていきたいという想いから、地元で日本初の FSC 認証を取った MOKKI NO MORI で生産された太鼓を用いて音楽を作成しようと考えています。音楽を奏でることで「環境に配慮した森づくり」や「将来守っていかねばならない美しい森林の良さ」を世界に発信していくことが可能になります。MOKKI NO MORI に実際に赴いて、代表の青木さんとプロジェクトディスカッションをしてきました。「もったいない音楽 PJ」とコラボしてさらに質の高い音楽、ビデオを作成していきたいと考えています。

８　成果

日本的精神である「もったいない」をコンセプトにした楽曲作成のプランを「麗澤大学・産経新聞　高校生プレゼンテーションコンテスト」で発表を行いました（令和４年２月 11 日）。全国で 60 チームより、８チームが選出され、最終審査で「最優秀賞」を受賞することができました。プレゼンテーションを作成するにあたり、ディスカッションを繰り返し、大学教授や大学生からも多くのアドバイスを頂きました。この模様が「西多摩新聞」「西の風新聞」「東京新聞」「産経新聞」などにも掲載され、あきる野市長・教育庁への表敬訪問も行い、多くの方にこの取り組みを知ってもらうことができました。また、４月に行われた「FSC アワード最終審査会」に全国 98 校から 10 校に選出され、FSC マークを広めるアイディアを音楽プロジェクトに関連させて提案を行いました。

９　今後の展開や展望

私たちが歌を通じて伝えたい「もったいない精神」とは、「最後まで、工夫して使い尽くそう」ということです。地域の協力者と共に、魅力的な歌詞、曲を作り、英訳をして世界に発信し、歌を通して、プロジェクトに協力してくださるパートナーを世界にも増やしていき、SDGs の実現に向けた行動をしていきます。このプロジェクトは、SDGs 目標 14「海の豊かさを守ろう」15「陸の豊かさも守ろう」に主にコミットするものですが、「もったいない」を広めることで目標 1「貧困をなくそう」、目標 2「飢餓をなくそう」にもつながるものにもなります。また、このプロジェクトを推進していくのは私たち高校生と意識あるミュージシャンです。SDGs 目標 17 の「パートナーシップで目標を達成しよう」にもあるように、一人では成し得ないこのプロジェクトをパートナーシップによる「協働」で実現し、気候変動から地球を守るアクションを起こしていきます。

～2022 年度の取り組みについて掲載された主な特集記事～

東京新聞（４月１日）

全国高校生プレゼンコンテスト
五日市高の５人 最優秀賞
「もったいない」精神を歌で世界に発信

産経新聞（３月６日）

「もったいない」を世界に発信する
五高生音楽プロジェクト

西多摩新聞（４月８日）

全国高校生プレゼンコンテスト

西の風新聞（３月３日）

西の風
たましん
もったいないを世界に発信
プレゼンコンで最優秀賞
念願の全国２位に
青梅三小金管バンド部

□聖徳学園と世界をつなぐ
□聖徳学園国際交流ボランティア
□高3 岡野高芽・高2 大世古葵・高2 稲葉剣斗・高2 石島茉優
□東京都

1. 発表を通して伝えたいこと

コロナ禍は外部活動が中心であった我々国際交流ボランティアの活動機会の大部分が失われるという危機をもたらした。しかし我々はそのような状況下でもめげることなく「聖徳学園生徒のグローバル意識向上に貢献する」という強い気持ちを持ち続けた。このような危機的状況を打破すべく、オンラインの利便性を最大限活かしながら生徒目線から何ができるかを考え、そして仲間と協働しながら着実に実行して行った。その結果、これまで取り組むことが出来ていなかった校内のグローバル 意識向上に向けた活動を、年間を通して本格化させることができた。

2. 課題発見・動機

国際交流ボランティアは、常に自分達が世界に何ができるか考え、そこから導き出されたアイデアをメンバー一丸となって実現することを大切にしている。活動を通して世界と繋がり、世界を知ることの楽しさや面白みを感じるということも重要視している。しかしながら、校内では、グローバルに対する興味・関心が低いという現状がある。これは、国際交流ボランティアが校内でのグローバル意識の波及に寄与しきれていないことも一因であると考えている。

私たちはグローバルという考え方を日本も含めた世界として広く捉えている。そのきっかけとなったのは中学生の時、授業の一環で日本の地域の抱える問題を解決するという取り組みを行なったことにあった。その授業で目の前にある課題に対して他人事になるのではなく、仲間と共に、主体的かつ果敢に解決に貢献することの重要性を理解した。このことで私たちは、校内のグローバル意識の向上だけを目的にするのではなく、日本を含めた世界の問題に対して、聖徳学園独自のアプローチによって、その解決に貢献することを最終目標としている。

3. 目標・ねらい

活動理念である「聖徳学園と世界をつなぐ」のもと、コロナ禍で活動が制限されている中でも積極的にグローバルに関連したイベント開催することで、聖徳学園の生徒たちに世界と繋がる機会を提供した。そのねらいは、1人でも多くの生徒に世界を身近に感じてもらうと同時に、それぞれが世界を変えられる力を秘めているということに気づいていてもらうことにある。

4. 具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等

実施期間：2021年4月～2022年7月

①世界の扉を開く会

・実施日

第1回：9月12日（日）第2回：10月17日（日）第3回：11月23日（水）第4回：2月19日（土）第5回：4月20日（水）6回：6月25日（土）7回（予定）：7月20日（水）

・取り組み参加者及び人数

1回目：12人　2回目：7人　3回目：7人　4回目：9人　5回目：14人　6回目：8人

・具体的取り組み内容

オンラインを駆使して校内生対象のイベント「世界の扉を開く会」を昨年度より定期的

に開催している。「世界の扉を開く会」では生徒に世界と繋がり、国々の文化・現状を知り、考える機会を提供している。海外の方を招いての交流会や、国際問題について話し合うディスカッションも行う。交流会を催すにあたり注意したこととして、オンラインでも「繋がり」を意識でき、そして英語が苦手な中学生でも楽しめるよう、日本語が話せる外国の方を招いたことにある。ディスカッションイベントの際は主にZoomを利用したのだが、ブレイクアウトルームに分かれて、すぐにディスカッションを始めるのではなく、緊張感を和らげるアイスブレイクを入れることで、参加者が、率直な意見交換ができるよう工夫した。
課題として、イベントへの参加者が少なく、参加者の顔ぶれも毎回ほとんど変わらなかったことが挙げられる。そのため定期的に開催しても、学校全体のグローバル意識向上には繋がらなかった。

②文化祭出展

・実施日

2021年12月9日（木）・12月10日（金）

・取り組み参加者及び人数

参加者（中1～高2＋教員）：120名以上

・具体的取り組み内容

上記の課題を解決するため、私たちは文化祭の場を利用し、イベントを開催することで多くの生徒に参加してもらうことを計画した。具体的な内容として交流会やディスカッションなど世界に対する高い知識や経験が求められるものではなく、「世界の遊び」や「世界の豆知識クイズ」を始めとしたグローバルに関心の低い生徒でも、楽しみながら世界に触れることが出来る企画を用意した。このような工夫を凝らしたことが影響してか、中1から教員まで120人以上が我々のイベントに参加した。（文化部の展示系の企画では来場者が1番多かった）

文化祭後、校内での国際交流ボランティアの知名度が上がり、後に実施した第4回世界の扉を開く会では、参加者の多くが文化祭でのイベントをきっかけに活動に興味を持った生徒であったなど、活動に対して興味を示してくれる生徒を増やすことができた。また学内の知名度の向上だけではなく、多くの参加者が楽しそうにイベントに参加している姿を見て、国際交流ボランティアのメンバーも活動に対する自信がつき、より一層団体の結束力を高めることも出来た。

③2021Global Day

・実施日

2022年1月15日（土）

・取り組み参加者及び人数

中3～高2：78＋213＋147＝438名

・具体的取り組み

国際交流ボランティアが企画や運営を学校から一任されたGlobal Dayというイベントを2022年１月１５日に開催した。このイベントはアトラクションや講座などを通して、中学3年生から高校2年生全生徒が半日かけてグローバルに触れるという企画であった。実施にあたって、参加者が受け身だけで終わってしまうことがないよう、国際問題の解決策等について話し合うと行った参加型の企画も盛り込むように工夫した。

コロナ禍の影響で学年間を跨がないなど制限の多い中での運営だったが、これまでの

様々なイベントの企画・運営を通して培った経験を活かすことができた。例を挙げると、企画の段階では当初400人以上を対象「世界の遊び」を実施する予定だったが、太子祭でのイベントの経験から30人以上を同時にまとめることですら難しいと気づけたことから、国際交流ボランティアの現状の運営能力に見合った企画内容に作り直すことができた。それ以外にも、国際問題の解決策について話し合う企画においても、これまでディスカッションイベントを通して育んできたファシリテーターとしての力量も生かすことができ、参加者の意見を十分に引き出すことができた。当日運営した生徒は国際交流ボランティアのメンバーだけではなく、「世界の扉を開く会」をきっかけに、グローバルに興味を持つようになった生徒達も加わったということも聖徳学園のグローバル意識向上という観点から大きな進歩であったと考えられる。

このようにコロナ禍でも「聖徳学園と世界をつなぐ」という目標のもと、積極的に活動を進めたことで団体設立史上初、生徒主体で学校全体を巻き込んだイベント開催が実現ができた。しかしながら、「楽しみながら」取り組むことが出来る企画を通し、1人でも多くの生徒にグローバルに興味関心を持ってもらうということを目標にしていたのだが、「世界の遊び」を400人規模のイベントで実施するのは実現困難であった。この反省を活かし、来年のGlobal Dayでは大規模集団を相手にしても「楽しみながら」取り組むことが出来る企画を立案したい。

5. 成果

・東京都国際理解研究発表会出場、会長賞受賞
・計6回開催した校内グローバルイベントのアンケート結果ではイベントの満足度として1番高い評価が4回平均で7割7分を超えた
・今年1月に開催したGlobal Dayのアンケート結果ではイベントに対して満足と答えた人の割合が約7割
・2022年2月にAEIS project contestでルワンダへの募金だけでない支援の形として「ルワンダ支援プロジェクトwith知育玩具」についての発表をし、優秀賞を獲得
・U-come（UNESCO communication meeting）代表から、国際交流ボランティアの積極的な取り組みを認めていただき感謝状が贈呈された
・ 2022年6月メンバー対象に行った「国際交流ボランティアに入って変わったこと」についてのアンケート調査にてメンバーの70%以上が「国際交流ボランティアに入ったことで、世界や地域の抱える問題に対して、他人事でなく主体的に解決に貢献したいと考えるようになった」と回答している。

（回答者数：24名）

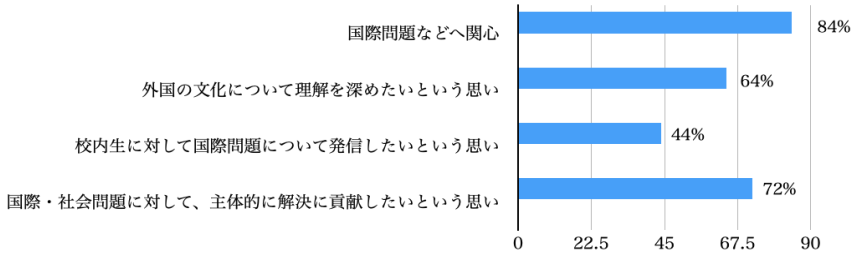


表1 「国際交流ボランティアに入ってどのようなことに対して関心・思いが高まったか」について問うアンケート結果

6. 今後の展開や展望

「聖徳学園と世界をつなぐ」ことを目標に今後、以下のことに取り組んでいく。

①　校内イベント（世界の扉を開く会・Global Day）の質の向上

・これまでは、イベントを開催することだけに追われていたが、今後は「世界の遊び」でただ世界各国の遊びを楽しむだけでなく、その国の文化紹介を行うなど、より一層参加者がグローバルへの理解を深められるような工夫をする。

・Global Dayにおいてより多くの生徒が楽しみながらグローバルに関心を持てる企画を行う為、団体に所属するメンバーから広く意見を募りたい。それにより、団体全体の帰属意識を高められることも期待している。また主体的に運営できるメンバーを育成していくことも必要であろう。

②　世界と繋がりながらグローバルマインドを育む

・これまでは、校内でのグローバルへの関心を高めることだけに視点をおいて活動を行ってきた。年間を通じた多くのイベントを通して、ある程度その目標は達成できたものと考えるが、今後はより興味関心の高い生徒を対象にしたイベントも打ち出していきたい。例えば、上記成果の欄に記述した「ルワンダ支援プロジェクトwith知育玩具」を始め、実際に海外と生で繋がる交流を進めていきたい。

③　生徒から生徒へのグローバルマインドの波及

国際交流ボランティアから学校全体へのイベント機会の提供だけでは、グローバルに対する意識向上は図れない。国際交流ボランティアは創設以来、学年の壁を越えて「思い」を繋いで活動を続けてきた。

国際交流ボランティアメンバーが実際の活動を通して世界と繋がり、知ることの面白さを見出している姿を周りの人に示し続けることが大切である。これにより他生徒へのグローバルマインドの波及につながるものと考えている。今後も多くの生徒にとって良いロールモデルとなるよう、日頃の生活態度から示していきたい。

第1回世界の扉を開く会

文化祭出展

第5回世界の扉を開く会

2021Global Day

タイトル　　:「おうちDE留学」
学校名　　:兵庫県立太子高等学校
発表生徒氏名:三島　莉央、平田　優真、中井　美玖

１　発表を通じて伝えたいこと
「国際交流は、いつでもどこでもできる！！　～海外をもっと身近に感じよう～」
コロナの影響で海外への往来が閉ざされた中でも、自分たちが普段使っているSNSで簡単に国際交流ができ、今までハードルが高いと思っていた海外とのやり取りも身近に感じることにより、より深く言語や文化の違いも習得ができる。

２　課題発見・動機など
本校では、姉妹校である台湾豊原高級中等学校と毎年相互の国際交流を行っているが、コロナ禍の状況でお互いの行き来が止まっている。授業においてオンライン交流や文通交流をしてきたが、台湾ではコロナの状況が悪化し学校を閉鎖してオンライン授業に切り替わっていることもあり、自宅にいながら何か交流ができないかと台湾の先生と話し合い協働でこの企画を始めることにした。また、授業以外で行えることに、対象生徒を増やせるメリットも考えられた。

３　目標・ねらい
英語のみならず、日本と台湾の両母国語を習得し、日常的に多言語に触れる。
台湾という国に対して興味を持ち、理解を深める。
海外の同年代の学生の日常生活に触れることで刺激を受け、学習意欲の向上や将来の展望が広がることをねらいとした。

４　具体的な取り組み内容・工夫・配慮した点
実施日・期間
2021年10月8日（金）～2022年3月18日（金）

主な実施場所
各家庭

取り組みへの参加者及び人数
太子高校8名　豊原高級中等学校11名　　合計19名

（取り組み内容）
本校生徒と台湾の生徒をランダムにチームを編成。
Google classroom 使用
課題は３つ
①相手国のトラベルプランを考える
②相手国の言語で自己紹介動画を作成
③トラベルプランのプレゼン動画を作成
課題提出も Google classroom で行う。

（１）　Kick off ceremony 2021 年 10 月 8 日（金）　日本時間午後 8 時
参加者全員がオンライン上で集まる。
「おうち DE 留学」の概要を英語で説明する。全員が英語で自己紹介をしたのち、チーム発表を行う。
その後は各チームでメッセージを送りあい、交流をスタートさせる。
上記の課題に向け、各々の家庭で SNS を使いながら交流を進めていく。

（Kick off ceremony の様子）

（２）１つ目の課題提出期限　2021 年 10 月 21 日
本校生徒は台湾のトラベルプランを台湾のチームメイトと相談しながら考える。
台湾生徒は日本のトラベルプランを本校生徒と相談しながら考える。

九份（きゅうふん）

千と千尋の神隠しのモデルと言われる、台湾にある町九份は、首都台北市から北東に 30km 離れた、新北市瑞芳区にある。石段や狭い路地、赤い提灯が特徴的なレトロな雰囲気を醸し出す街として、世界中の観光客から注目されている。

蓮池潭（れんちたん）

人造湖蓮池潭のシンボルは龍虎塔（ロンフーター）。ここは保生大帝を祀る廟で、パワースポットでもある。龍の口から入って虎の口から出ると厄除けになると言われている。

六合夜（ろくごうや）

夜市の通りは普段は車道となっているが、夕方 17 時 30 分ごろになると車とバイクが通行止めとなり、徐々に夜市の屋台ができはじめて 6 時ごろにたくさんの現地のお客さんや観光客でいっぱいになる。

国立故宮博物院（こくりつこきゅうはくぶついん）

中国美術工芸コレクションとして名高い国立故宮博物院。約 70 万点の収蔵品があると言われており、そのうち約 6,000～8,000 点が常時展示されている。人気の宝物数百点を除き、3～6 ヶ月おきに展示品が入れ替えられる。

【本校生徒が提出したトラベルプランの一例】

【台湾生徒が提出したトラベルプランの一例】

（３）２つ目の課題提出期限　2022 年 1 月 14 日

本校生徒は、中国語で自己紹介をする。

台湾生徒は、日本語で自己紹介をする。

それぞれ、お互いの国の言葉を教え合い、練習を重ね最終的に自己紹介動画を提出。

本校教員が台湾の生徒の自己紹介を審査し、台湾教員が本校生徒の自己紹介を審査する。

（４）Wrap up ceremony 2022 年 3 月 18 日（金）　日本時間午後 8 時

参加者全員がオンライン上で集まる。

結果発表を行い、この企画に参加した感想を一人ずつ発表。

結果は１グループのみが３つの課題をこなすことができていたため、このグループに賞が贈られた。

（工夫・配慮した点）

・豊原高級中等学校では、コロナの影響で対面授業から自宅でのオンライン授業になっていたことから、『Google Classroom』の使用方法に精通していることから台湾の先生にこの企画で使用するオンラインの準備をお願いした。

・何度も台湾の先生と打ち合わせをして、両校が望む課題を決めた。

・Kick off ceremony と Wrap up ceremony 以外は極力自分たちの力だけで課題を進めるように事前に生徒たちには伝えていたが、定期的に個々に進捗状況や困っていることなど聞くようにした。終始台湾生徒のペースになっていたグループもあり、特に課題提出日が近くなってくると、上手く進まないことに本校生徒は焦りを見せてきていたが、あまり追い詰めることはせず自分達で対応していけるように見守る姿勢でいた。

５　成果

生徒からの感想では、この企画を通して本当にたくさんのことを得ることができたという意見があった。数ヶ国語を操る台湾の同年代から刺激を受け、英語の大切さを痛感したという声も多かった。また、一番多かった感想では、海外に「友達」ができたということだった。授業で行う単発的なオンライン交流では味わうことができなかった、日常的な交流をすることによって、言語習得だけでなくお互いの国の「生」の生活や文化、人々の考えなどに触れることができたからではないかと考える。また生徒たちが普段使っているＳＮＳを通じて交流したことで、気軽に連絡を取り合えたため「真」の国際交流ができたのではないかと考える。

６　今後の展開や展望

今年度も台湾との相互の行き来は難しいかもしれないが、引き続き今年度もオンライン交流を進めていきたいと考えている。数ヵ国語を操る台湾の生徒に刺激を受けていたので、次は参加国を増やしていき、多言語に触れる機会を作っていきたいと考えている。

たくさんの国に「友達」ができる機会を提供し、将来コロナが収束したらその国々に「友達訪問」がきるようになればと思っている。

「ＥＳＤで外国人が住みやすい街づくり」

兵庫県立神戸商業高等学校　　岩本愛生　茶畑匠海　中谷彩那　森川綜太

１　発表を通して伝えたいこと

この研究は 2021 年 4 月から 2022 年 2 月にかけて、課題研究の授業において神戸に住む外国人の支援について高校生ができることを考え、アクションに起こした実践研究である。外国人が住みやすい街づくりには、外国人への言語（文化理解）支援と日本人の外国人への理解を深める取り組みの両方が必要だと考え、神戸の外国人が通う夜間中学校を訪問し高校生が企画した「にほんごすごろく」を通して遊びながら日本語や日本の慣習について学ぶ機会を作り、地域の商業施設で子どもに外国の遊びを紹介する異文化理解ワークショップを開催した。

２　動機・課題発見

研究メンバーはそれぞれ幼少期に外国籍のクラスメイトがいた経験を持つメンバーである。日本に住んでいながら日本語が分からずクラスや社会で孤立する人をなくしたいと考え、外国人が住みやすい社会には何が必要か、様々な視点から考察を行った。

日本や神戸に住む外国人数の推移や国籍、就労外国人の職業や、彼らに対する公的機関の生活支援と就労支援について現状分析を行った。その後日本に住む外国人への聞き取り調査を行い、日本は便利・安全で住みやすい国であるが、日本で生活していても日本人と接する機会が非常に少ないこと、そして日本人にもっとフレンドリーに接してほしいと思っていることが分かった。そこで、外国人が住みやすい街づくりのためには、外国人への言語（文化理解）支援と、日本人の外国人への理解を深める機会づくりの二つが必要だと考えた。

３　目標・ねらい

私たちは二つの目標をもってこの研究を進めた。一つは外国人の住みやすい街づくりのために、外国人に言語習得支援を行い、非言語コミュニケーションを通して日本語や日本文化・慣習について知ってもらうこと、二つ目は日本人に対して、外国のことを知る機会を設け異文化への理解を促すとともに外国や外国人について無知からくる差別や偏見をなくすことを目標とした。

４　具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等

【外国人への言語（文化理解）支援（夜間中学校訪問）】

2021 年 6 月に、外国人が日本語を学ぶ夜間中学校（神戸市立丸山中学校西野分校）を訪問し授業見学を行った。全校生徒 31 名のうちほとんどが外国籍の生徒で、シリア、ヨルダン、ベトナム、フィリピン、中国といった国籍の生徒が在籍していた。生徒の日本語の習得段階に合わせてクラス分けをされており日本語が話せないクラスはシリア人、ヨルダン人が多かった。

[2021 年 6 月 23 日 神戸市立丸山中学校西野分校訪問　高校生 5 名、夜間中学校学生 21 名]

外国人の生徒さんにインタビュー

数学の授業に参加し、問題に挑戦

授業の合間にゲームの話で盛り上がる

この授業見学の後、「外国人の住みやすい街づくり」のために必要な言語支援について、夜間中学校で日本語を教える授業実践をさせていただけないか依頼した。すると、金子教頭先生から「外国人の学生さんは学校に来る時間を捻出するのが難しい生徒さんも多い。少ない時間のなかで日本語指導が遅れている点も考慮し短時間で日本語習得に効果のある具体的な取り組みを提示して欲しい」との返答を頂いた。

そこで、短時間で効果的な日本語学習企画に踏み出し兵庫国際交流会（HIA）の日本語教室の授業見学を依頼し、外国人と日本人の交流については神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部の栗原先生に相談した。栗原先生からは「夜間中学校を訪問して外国人と交流するということは、外国人にとっても普段出会うことのない高校生と触れ合う貴重な体験、高校生は日本語を教える授業をするというよりも、授業で外国人が日本語を学ぶ横についてサポートをするだとか、自分たちとコミュニケーションをとることで外国人の方が日本人の高校生と話す体験をしたという経験を共有することがお互いにとって良いのではないか」というアドバイスをいただいた。

そこで私たちは外国人学生と高校生がコミュニケーションを取りながら対話的・協働的に日本語を学べるような企画を考え、丸山中学校西野分校を訪問し先生方にプレゼンを行った。その結果、「すごろく」の遊びを取り入れた日本語学習の企画を進めていくことになった。

[2021 年 10 月 7 日 神戸市立丸山中学校西野分校訪問　高校生 3 名、夜間中学校教員]

５名の先生方を前に企画書のプレゼン

私たちは授業案を考えるうえで、外国人学生の日本語の習熟度をもう少し具体的に知る必要があった。そこで、神戸学院大学の栗原先生からアドバイスをいただいた外国人学生のサポート役としての授業参加も踏まえながら、再度丸山中学校西野分校を訪問し授業参加させていただくことになった。

[2021 年 12 月 15 日　神戸市立丸山中学校西野分校　高校生 3 名　夜間中学校生徒 26 名]

カードを使って、動詞の使い方を学んでいる様子

音楽の授業で高齢の日本人学生とハンドベルを演奏する様子

上記の授業参加によって、外国人学生にとってカタカナは難しいことや、先生方の板書の様子から「わかち書き」での文章表記が望ましいことが分かった。そして先生方からは、すごろくの問題作

成にあたっては、普段の授業で地歴公民や理科の学習が遅れていることから地歴公民や理科の内容を取り入れた問題を作成してほしいという依頼があった。私たちがこれらの発見をふまえ、「にほんごすごろく」の作成に取り組んだ。

私たちが作成した「にほんごすごろく」は、クイズのマスとイベントのマスを作成し、それぞれのマスに駒が止まるとカードを引き問題に答えるといった活動を取り入れた。クイズカードには日本文化や慣習、知識を問う問題を用意し、イベントカードには日本語での簡単な質問や、身体を動かしながらその場にいる皆がコミュニケーションを取れるような問題を用意した。

「にほんごすごろく」は、丸山中学校西野分校の生徒全員が参加する学校行事として実践させていただくことができた。すごろくを知らない外国人学生も多く、ルールに戸惑いがあった様子だったが、すぐに慣れて終始楽しい雰囲気であった。夜間中学校の先生が披露したコマ回しの技を見て皆で盛り上がる様子や、クイズについて相談し合う様子や高校生に気軽に質問する様子も見受けられた。授業後の外国人学生へのインタビューでは、「お疲れ様とご苦労様の違いを初めて知った」、「高校生との何気ない話が楽しかった」、「高校生、先生と皆で盛り上がったのが楽しかった」といった意見をいただいた。また、先生方からは「外国人学生の普段見せない表情を見ることができた、日本の文化に触れるいい機会になった」という評価を頂いた。しかし一方で、「日本語の学びは、段階を追った学習と反復練習が習得に繋がるので、今回の企画が日本語の習得に繋がったかと言われると難しい部分もあった」といった言葉をいただいた。けん玉やこまなど身体を使った交流は和やかな雰囲気が生まれ、交流の手ごたえを感じた。しかし、すごろくの運用面、接し方についてはもう少し工夫や積極性が必要だったという反省や課題が残った。

[作成した「にほんごすごろく」]

[2022 年 1 月 13 日　神戸市立丸山中学校西野分校　高校生 3 名　夜間中学校生徒 22 名]

【日本人の外国人への理解を深める：異文化理解ワークショップ】

私たちは、日本人に対して外国人について知る機会を増やすことが外国人の住みやすい街づくりに繋がると考え、子ども向けの異文化理解ワークショップを企画し近隣の商業施設ブランチ神戸学園都市に依頼をし、未就園児から小学校低学年の子どもを対象に、外国の遊びを通して外国への興味を持つきっかけをつくる異文化理解ワークショップを実施した。ブラジルの遊び「ペガ・ヴァレタ」とベトナムの遊び「オー・アン・クアン」を日本人の子どもに紹介する規格を考え、外国人の子どもへ参加を呼び掛けるために、英語でワークショップのポスターを作成し近隣のインターナショナルスクール（マリスト国際学校）に掲示を依頼し校内に掲示を依頼した。ワークショップでは 12 名の日本人の子どもが参加し、子どもたちと外国の遊びをしながら外国の文化や風習について紹介したり、外国人との接し方について話をしたりした。参加した子どもたちからは「外国について知ることができた、高校生と遊ぶのが楽しかった」とった意見をいただいた。

[左：2021 年 7 月 15 日　ブランチ神戸学園都市プレゼン 高校生 2 名]
[中央：英語版チラシ]
[右：2021 年 11 月 21 日　ブランチ神戸学園異文化理解ワークショップ 高校生 5 名]

私たちは外国人との複数回の交流で、共通の言語がなくても相手に寄り添う気持ちがあれば良い関係を築くことができることを学んだ。また、夜間中学校で外国人学生が熱心に日本語を学ぶ姿や、高齢の方が冬の寒い日も暖房のない教室で楽しそうに学んでいる姿を見て、自分たちが当たり前に高校で勉強していることがいかに大切で貴重な時間であることを学んだ。異文化理解ワークショップでは、ベトナムを知らない子どもたちにベトナムについて知ってもらう機会を持つことができ、彼らが次ベトナムの人に会った時のとっつきにくさを減らすことができたのではないかと考えた。そういった外国や異文化に触れる機会や経験を繰り返し重ねていくことが外国人への理解を深めることに繋がるのではないかと感じた。これからも外国人との交流を積極的に行い、相手の国の文化や慣習を知る機会を大切にして、外国人の住みやすい街づくりに繋げていきたい。

Pamodzi　～このバッグてげかわいっちゃが～

宮崎学園中学・高等学校　インターアクト部

1. はじめに

私たち宮崎学園インターアクト部は、例年、40 名ほどで活動しており「世の中に目を向け、自分にできることを楽しみながら取り組んでいこう」をモットーに、人とのつながりを大切にしながら日々の活動に励んでいる。普段の私たちの活動は、世界の問題について考えるための勉強会を実施したり、地域の中で自分たちにできることを考え活動を展開している。

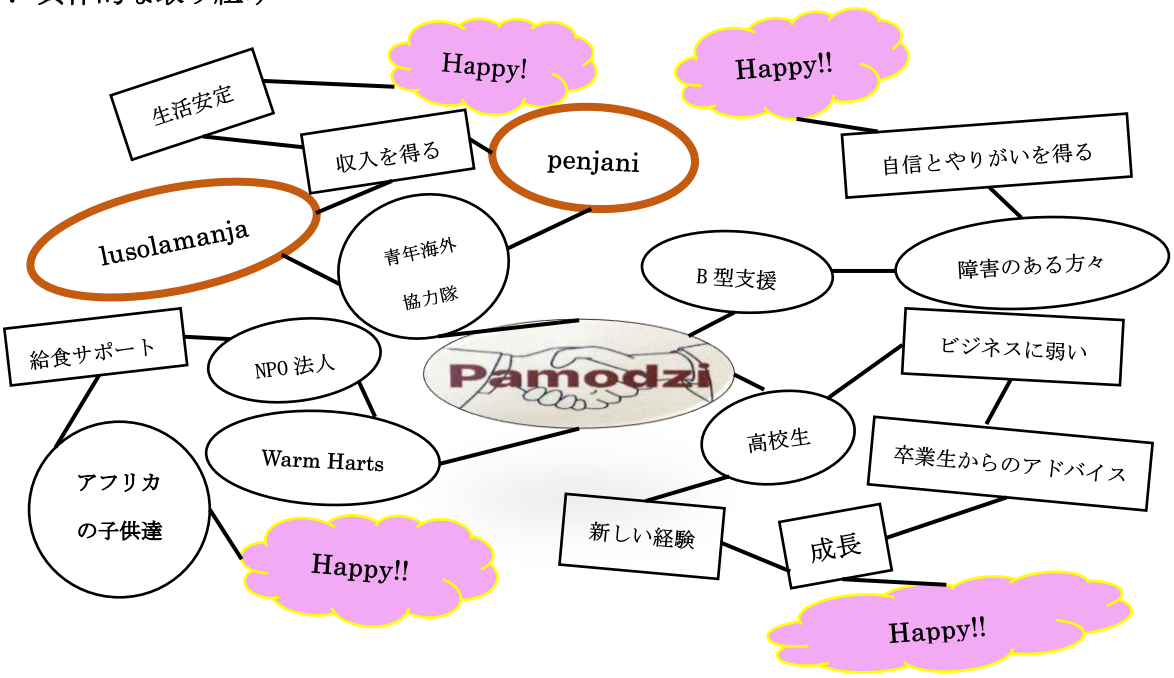
今回、私たちは「Pamodzi」という‘ワクワクの詰まった’活動について発表する。

「Pamodzi」とはチェワ語で「共に」という意味である。アフリカにある最貧国と言われるマラウイ。１日を２ドル以下で生活する人たちも多くいる。私たちは、そのマラウイの女性団体にバッグをオーダーして販売を行っている。このバッグ販売を通じて、私たちの世界に対する見方は大きく変化した。この活動を行う上での問題は多く、くじけそうになることもたくさんある。しかし、相手を理解し、何とかここを一緒に乗り切りたいという強い思いが、私たちとマラウィアンの間の壁を取り払ってくれる。持続可能な販売をしていくために、私たちの取り組みについて、今回多くの人に知ってもらい、活動の輪を広げられたらと考えている。

２．目標・ねらい

私たちの活動名である「Pamodzi」は「共に」という意味である。マラウイという国と繋がり、みんながｈａｐｐｙになれるような活動を行っていきたい。また、ｐａｍｏｄｚｉの商品を通して、アフリカ布の魅力をもっと知ってもらいたいと考えている。

２．具体的な取り組み



バッグ販売を行うにあたって、現在私たちがバッグを依頼している団体は３つ。１つはルソラマンジャという団体だ。これはマラウイの女性団体であり、この団体の代表者は、これまでに、日本人と関わる機会も多かったこともあり（青年海外協力隊の方たち）考え方や感覚が、比較的日本人寄りだが、すべてのやり取りはメールや無料アプリなどを用いて自分たちで行うので、かなり時間がかかる。２つ目のペンジャーニという団体は、現地で日本人の方が中心となって活動する団体だ。日本人の方がいらっしゃるので、やり取りはスムーズだ。多くのバッグは、これら二つの団体から仕入れてきた。そして、仕入れたバッグには「miyazaki」と「malawi」の頭文字となる「m」の刺繍(①)を、部員で施し販売している。

←①　私たちは「Pamodzi」という活動を行うにあたって、マラウイについて、積極的に学びを深め、マラウイアンが置かれている状況について理解するようにしている。そうすることで、問題にぶつかったときに、簡単にあきらめたり、逃げたりせずに済む。また、そうやって、マラウイアンを理解することで、マラウイを好きになったし、「共に」生きていくために活動をしようという気持ちが、一層強くなった。昨年は大洪水が起きて、大変な被害があった。その時にはいち早く連絡を取ったりした。活動を通して絆を深めることができている。マラウイアンにとっても同じようで、日本で地震が起きるとすぐに連絡をくれる。このようにして、バッグ販売を通じて、私たちは世界と繋がることができている。

世界の状況が厳しい中、航空便の減便や物価の高騰など、現地から商品を仕入れることが難しくなっている。そこで、昨年、「マラウイ×B 型事業所×高校生！」という、新しい取り組みをスタートさせた。これは、SDGs についてのワークショップの中で、世界の貧困について向き合うことと同じくらい、自分たちの生活する「日本」の抱える問題とも向き合うことが大切だと考えたからだ。私たちはマラウイと繋がり続けたい。マラウイを中心としたつながりの中で、高校生の私たちが活動をすることで、購入してくださった方が！マラウイアンが！事業所のみなさんが！私たちが！ｈａｐｐｙになれる活動をしていきたいと思っている。

３．We love malawi

⑴マラウイの概要

正式名称はマラウイ共和国。人口は約 1900 万人(2020 年)であり、言語はチェワ語で、アフリカ大陸の赤道より南に位置し、南北に細長く、タンザニア、モザンビーク
ザンビアの三国に囲まれた内陸国である。(②)

←②　　③→

マラウイの国旗（③）は、上から「アフリカの人々を表す黒」「自由のために闘って流した血を表す赤」「マラウイの豊かな自然を表す緑」の三色になっている。マラウイの人々は優しく温厚な性格で、独立後一度も戦争をしたことがなく、「Warm Harts Of Africa」＝「アフリカの温かい心」という愛称を持つ。国土の 1/5 を占めるマラウイ湖は、アフリカで３番目、世界で９番目の広さであり琵琶湖の約 44 倍。とても美しく魚がたくさん生息している。

気候は、降水量が比較的多く緑豊かであるとされるが、特産物はタバコ、コーヒー、紅茶、サトウキビ。中でも紅茶やルイボスティーは有名で、日東紅茶やタリーズコーヒーでも扱われている。

⑵マラウイの現状

水道普及率	(2020 年)	215 位/224 ヵ国	2000-2020
安全な飲料水利用率	(2020 年)	198 位/229 ヵ国	2000-2020
トイレ普及率	(2020 年)	209 位/227 ヵ国	2000-2020

（WHOより）

これはライフラインに関するデータである。SDGs 達成からは、かなり遠い。私たち宮崎学園インターアクト部が「Pamodzi」の活動をスタートさせたのは、5 年前。顧問の先生がマラウイに海外研修で行った際の写真を見せてもらったことがきっかけである。左の写真は現地のトイレの写真である。この写真を見て「マラウイの衛生環境の向上に寄与できれば」との思いでスタートさせたこの活動だが、さまざまなチャレンジを経て、現在の活動に至っている。

４．現在の私たち

『持続的なオーダーで安定した収入を提供する』ことを達成するために私たちは次のようなことに取り組んでいる

① 認知度を高める … 地域のイベントに参加し販売 → 直接商品について話ができる。

② Instegram(④)を開設 … 流行に乗って販路を拡大。【pamodzi_malawi】

→ 全国に発信することで、会ったこともない方が、私たちの活動を知り購入してくださることが増えた。また、B 型事業所のみなさんは、私たち Instagram を見ることで、どんな方が購入してくださっているかを知ることができるとおっしゃってくださる。また、商品がどのような経路で、どんな段階を経て手元に届くのか、購入者の方にお伝えすることもできている。

③　学びを深める　…　自分たちが理想とする活動を行うためには、インプットも大事だと考えている。現に、B 型事業所との活動に行き着いたのは、SDG s についての勉強会を通して、自分たちの足元を見直す機会を持ったからだ。Ｂ型事業所の方との活動を行うにあたって、まずは宮崎にある事業所に打診をしたりもした。そこで、障がいのある方々の特性について学ぶ機会もいただいた。また、世界の「貧困」を解決するためには、「貧困の原因」について学ぶ必要もある。携帯電話や児童労働、戦争についてなど、多岐にわたって学習会やワークショップに参加して、自分たちの引き出しを増やすようにしている。そうして、たくさんのつながりの中で、新たな活動につながることも多くある。たとえば、WarmHartsCoffee。WarmHartsCoffee は、マラウイのフェアトレードコーヒーを通して、マラウイの子どもたちに給食を提供している。代表の方にお話をしていただき、「支援」の限界や、世界各国の途上国への関わり方について教えていただいた。

このような積み重ねによって、わたしたちは「ｐａｍｏｄｚｉ」を、持続可能なものにするべく活動している。

６．今後の展開や展望

現在、商品の販売価格は、ほぼ仕入れ値で販売している。私たちは、大きな利益を得ることよりも、マラウイのことやマラウイの商品の良さを知ってもらいたいと思ってそうしてきた。しかし、同じような商品を販売し生計を立てていらっしゃる方からすると、いいことではない。今後は適正価格についても考え、そこで得た収益を何かしらの形にしてマラウイに還元していく方法を考えていきたいと思う。

また、オンラインショップを開設し、バッグの販売数を増やすことができれば、持続可能性は高まると考える。売り上げを上げることを目標にし、マラウイの団体に足踏みミシンを貸し出しできるように頑張っていきたい。

そのためにも、もっともっと世界についての学びを広げ、活動の幅を広げたい。高校生の私たちができること、高校生の私たちだからできることを模索し、楽しみながら活動していきたい。

「このバッグ、てげかわいっちゃが―！」をフレーズに、全国にｐａｍｏｄｚｉのバッグを広めていきたい。

令和４年度　第 59 回　全国国際教育研究大会　生徒研究発表

「Think Globally , Act Locally」
～ラオスを想い、高知でできること～

高知県　高知商業高等学校
氏原　麻喜　頼　　美樹　藤村しおり
伊尾木大輝　西本 怜生　山本　莉穂

１．発表を通して伝えたいこと

コロナ禍において，ラオスへの訪問は中止。また様々な学校行事も延期・中止が相次ぎ,私たちはもがき，苦しんでいました。
「できない・やれない」ことを理由に自らの行動を諦めかけることもありました。
しかし，できないからやらない，ではなく今できることを考え，行動を起こしたとき、今の私達でもできる国際協力の形を見つけることができました。

２．動機・課題発見

（1）ラオス学校建設活動の継続と発展　【いつから活動が続いており，何を目指しているのか】

1994 年、一片の新聞記事をきっかけにラオスという国を知った。NGO「高知ラオス会」の支援により、私たちのラオス学校建設活動が始まった。翌年、1995 年ラオス現地へ訪問。子どもたちや地域の方々との交流を通して、ラオスの子どもたちが学校に通うことに喜びを感じていることを知った。はじめてのラオス訪問で私たちはたくさんの学びを得ることができた。
このラオス訪問をきっかけに私たちは活動を発展させた。

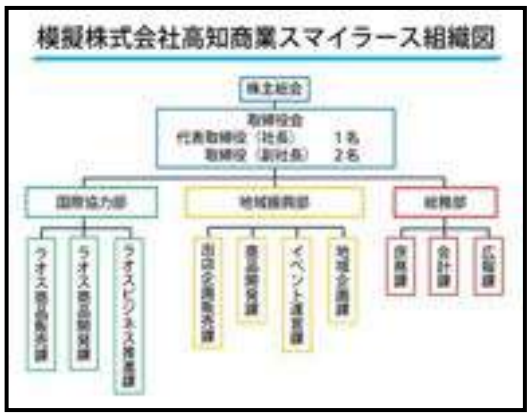
学校を贈る

▲1994 年「高知新聞朝刊」一片の記事

1996 年	模擬株式会社を設立
1998 年	百貨店でのラオス商品販売
2000 年	はりまやストリートフェスティバルの開催

▲2017 年までに８校の学校建設を実現

また、エコマネーへの挑戦や本物のお店を 3 か月間オープンした。そして高知県内企業やラオスとの商品開発など挑戦を繰り返してきた。そして、私たちが取り組んできたラオス学校建設活動も今年で 29 年目を迎え、ラオスに訪れた生徒も 268 名となった。私達の取り組みの特徴は、毎年、校内に模擬株式会社を設立することにある。全校生徒、保護者、教職員の３者が株主となり、１株 500 円にて出資する。その出資金を元手にラオス現地を訪れ、ラオスの布製品や民芸品、銀製品を仕入れる。そして地元高知にてイベントを開催。得た利益から株主に配当金をお支払いし、残りの利益をラオス学校建設資金に充てるという仕組みである。近年、ラオスでは就学前教育の重要性から幼稚園の建設が求められており、私達は 1998 年に建設したサンニャイ小学校に併設したサンニャイ幼稚園を建設することを目標に取り組みを継続していた。



▲模擬株式会社高知商業スマイラース組織図

（2）グローカルバウム　【グローカルバウムとはどのような商品なのか】

学校建設に必要な資金は商品開発を中心に行っている。右図のグローカルバウムは、私達高知商業生と地元の老舗旅館である城西館と共同で商品開発した手のひらサイズのバウムクーヘンである。豆植えや茶摘みといった生産段階から販売まで生徒がそのすべてに携わり、開発している。目的は，グローバル（ラオス）＋ローカル（高知県）双方の発展である。現在、63 万個を売り上げており、利益を全額ラオス学校建設活動に充てている。しかし、コロナ禍において販売活動の中止やおみやげ需要の減退により売上は大きく落ち込んだ。私達の国際協力活動は大きな困難に直面した。

▲商品開発したグローカルバウム５種類

３．具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等

（3）９校目の学校建設に向けた購入型クラウドファンディング

新型コロナウイルスの影響により 2020 年・2021 年のラオス訪問が中止。ラオスに行けないということはラオス現地にて商品を仕入れることができない。また現地での調査活動や過去に建設した学校に通う子どもたちとの交流もできないため、私達が長年継続してきたラオス学校建設活動の仕組みの継続が困難になった。

しかし、私達は諦めなかった。ラオスに行けなくてもできることはあると考え、全校生徒のリーダーを集めて話し合いを実施。話し合いの中では、新しい商品を開発してみてはどうかやラオスから大量に商品を仕入れてはどうかなど様々な意見が出されたが、どれもコストや時間がかかるものばかり。そのような中、出た意見が購入型クラウドファンディングへの挑戦だった。

私たちは、以下のような仮説を立てた。

仮説	購入型クラウドファンディングを活用し，グローカルバウムを全国に広め、購入してもらうことができれば利益獲得に繋がり、ラオス学校建設活動を継続できるのではないか

▲リーダーを集め課題解決型会議を実施

▲お客様相談特設コーナーにて説明

（4）取り組みの過程で工夫した点

実際にクラウドファンディングのサイトを立ち上げ、2020 年 10 月 28 日から 12 月 16 日まで実施した。その過程では、文章で分かりにくい説明は SNS を活用した広報活動に取り組んだ。また、お客様相談コーナーを地元商店街に設け、対面での説明も行った。サイト上には、ラオス学校建設活動について詳細を記載。全国の方に広める工夫を施した。その結果、目標金額 150 万円を大きく上回る 185 万円もの資金を獲得した。ここから発送費や手数料などの経費を差し引いたとしても目標金額を達成した。

▲9 校目の幼稚園建設に必要な資金を獲得

その結果、2020 年 12 月 19 日に 9 校目となるサンニャイ幼稚園の建設資金を贈呈するため、ラオスとオンラインでつなぎ契約式を実施した。そこでは、ラオスの人々と言葉を交わしこれからもこの関係を深めていくことを確認した。そして 9 校目の幼稚園建設がスタートした。

▲ラオス現地とオンライン契約式を実施

（5）ソフト面の充実に向けた県内企業との商品開発

2021 年から現在まで私達が挑戦していることがある。それはソフト面の充実である。そこで、私たちは以下の目的・目標を立てた。

目　的	サンニャイ幼稚園のソフト面を充実させる
目　標	サンニャイ幼稚園に教材を贈呈する

過去のデータや聞き取り調査の結果から、教材として使用する塗り絵セットやお昼寝用のゴザやまくら、日用品として使用頻度の高いタオルケットやハンドタオルなどを贈呈することが決定。目標金額を 5,000,000kip に設定。2021 年 12 月 8 日時点で 1 kip＝0.010 円のため目標金額は日本円で 5 万円となる。これまでに建設している 2 校の幼稚園にも教材を贈呈すべく日本円で 15 万円の利益を上げることを目標とした。

▲目標金額の設定と為替レートの確認

（6）共同商品開発の実施【どこの企業と、どのような商品を開発していくのか】

どのように目的と目標を達成すべきか話しあい、「商業生の私たちだからできること」「コロナ禍の今だからこそできること」をキーワードに商品開発を行うことが決定した。商品開発の内容については、メンバー会議を実施し、コロナ禍の今だからこそ「衛生教育」をラオスのこどもたちに伝えるべきだという思いから、衛生用品を開発することが決定した。高知県内で不織布を取り扱っており、除菌シートなどの衛生用品の販売を行っている三昭紙業と出会い、模擬株式会社の目的や目標についてプレゼンテーションを実施。
ご賛同いただき、三昭紙業とともに商品開発を行うことが決定し、会議を重ね、右図の商品を完成させた。

▲衛生教育をテーマに
除菌シートを開発

（7）商品開発の過程・工夫【どのような工夫を施したか】

商品開発ではゾウやテントウムシ、タコやクジラなど、子どもに人気の動物を形にしたシールを考案し、子どもが切り貼りして商品を完成させることで使用したくなるという仕掛け学を活用した工夫を施した。

今回開発して得た利益からラオスの幼児に除菌シートを贈呈することを計画した。現在、ラオス語の表示ラベルや説明書を作成しており、来年夏のラオス現地への訪問の際に贈呈できるよう準備を進めている。

▲動物シールを蓋に貼る（４種類）

４．成果

（１）取り組みによる成果

2022 年 5 月 7 日には、9 校目となるサンニャイ幼稚園の落成式をラオス現地とオンラインを結び開催。式典の中では、ラオスの子どもたちからの歌のプレゼントや高知商業生総勢 100 名によるよさこい踊りの披露などが行われた。ラオスの教育省の方からは、「幼稚園が完成したことで両親の共働きが可能となった。幼稚園を建設していただいたことに心から感謝している」と述べられた。コロナ禍においてラオスに直接訪れることはできなかったが、私達が地元高知で地道に取り組んだ活動が、ラオスの「幼稚園」へと変わり、ラオスの質の高い教育の実現や家計を支える助けになっていると学び、私達の国際協力が形となって見えることに喜びを感じた。

▲オンライン落成式の様子

▲完成したサンニャイ幼稚園（2022 年落成）

▲高知商業生による「よさこい踊り」披露

▲ラオスのこどもたちから歌のプレゼント

５．今後の展望、展開

今はまだコロナ禍でラオスに行くことはできない。でも、決して活動を止めてはいけない。ラオスを思い、高知でできる活動は何か考えることが大切だ。そこで、今年 11 月、県内の百貨店（大丸）と共催で初めての試みとなる「第 1 回高知商業グローカルフェスティバル」を開催すべく準備を進めている。当日は、ラオス商品の販売やフェアトレード素材と高知県産の食材を使った商品販売等を計画している。そして得た利益にて建設した学校のソフト面の充実を図る。

ラオスを思い、高知で行動し続ける！
これが私達の「Think Globally , Act Locally」

教職員による研究発表

今後の海外交流に必要なポジティブ３Ｃｓ

愛知県立津島高等学校　伊藤和明

０　はじめに

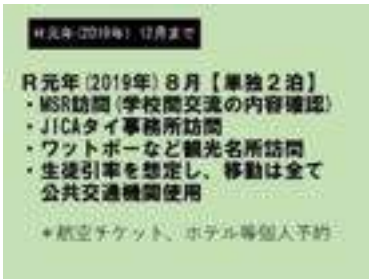
本校は 120 年有余の歴史をもつ伝統校であり、平成 27 年度に文部科学省から「SGH･アソシエイト校」の指定を受け学校全体でグローバル教育を推進している。

その一環として平成 30 年にタイ・バンコクの高校と姉妹校提携を結び、コロナ禍前の令和元年９月から、将来的な現地交流を目指してオンライン交流を開始した。さらにコロナ禍においては、令和２年度に姉妹校の生徒対象に工夫を凝らしたオンライン交流を継続し、その取組は外務省のウェブサイト「グローカル外交ネット」に掲載された。そして令和３年度には JICA タイ事務所の現地職員とオンライン会議を開いたり、続いて中国・昆明市の女子高校の生徒とオンラインで意見交換をしたりするなど、常に新たなチャンネルを設けて交流を継続している。以上を踏まえ、次の３つに分けて本校の取組を発表する。

１　コロナ禍前の海外交流等【令和元年(2019 年)12 月まで】

国際理解コースでは、１年次に英語合宿や地元行事への参加、２年次に豪州研修、小中学校への英語出前授業、市役所と連携し「市 PR 映画の英語字幕作成」等を実施。

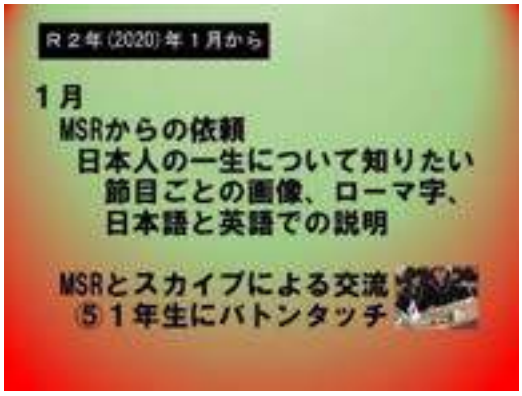
平成 29 年、愛知県国際教育研究協議会会長校を務めたことを契機に、県知事の後押しがあり、翌年タイの高校と姉妹校提携。＊愛知県と良好な経済関係、時差を考慮

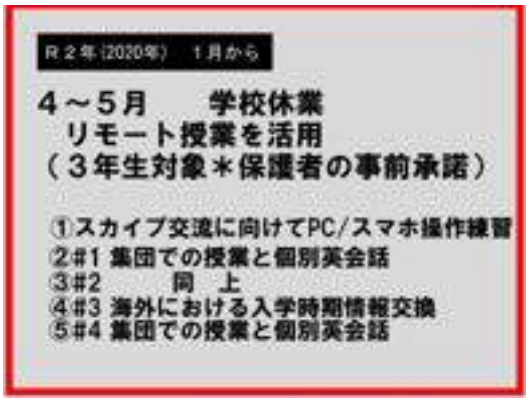


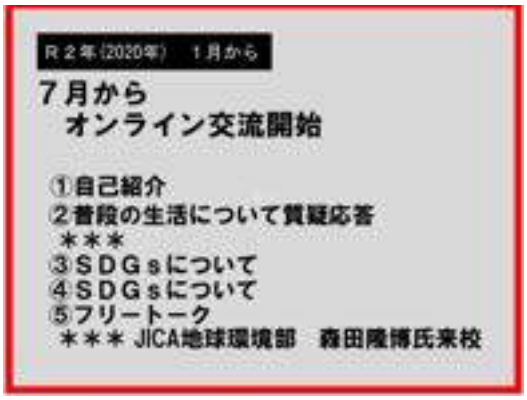
←４回分のスカイプ（日・英）８枚

2　新型コロナウイルス感染症の流行【令和２年(2020 年)１月から】

バンコク姉妹校(MSR)から、１月下旬開催の文化発表会（ACADEMY）で『日本人の一生』の展示で、「画像及びローマ字、日本語、英語での説明原稿」が欲しいとの依頼あり。その後、日本ではほどなく新型コロナ感染防止対策として学校が休業となり、日常生活では３Ｃｓを避けるよう求められる。４月からはバンコクとの交流が途絶えたものの、来るべきオンライン交流に向けて生徒と PC やスマホを活用した授業。それと並行して MSR の担当者と連絡を密にとり、７月からオンライン交流再開。





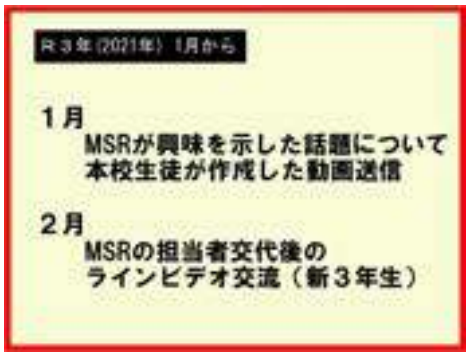


途中、JICA 地球環境部の森田隆博氏（本校卒業生、現 JICA タイ事務所長）による講演を開催。また MSR には、本校 120 周年記念式典(11 月)でのメッセージを依頼。

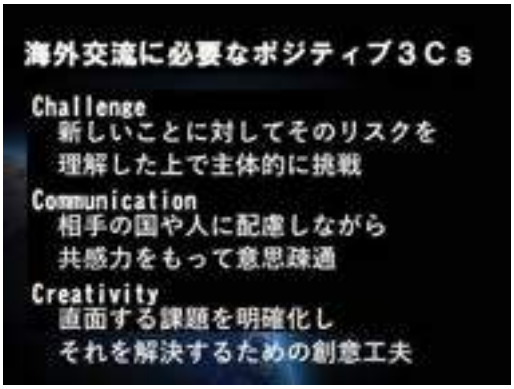
スカイプ（日・英）、森田氏講演等　→　16 枚

3　新型コロナウイルス感染症の感染拡大【令和３年(2021 年)１月から】

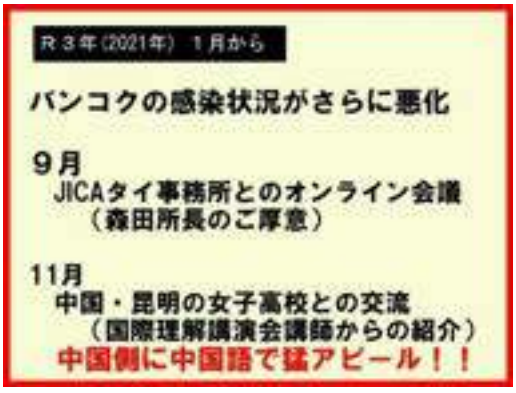
本校生徒が日本の生活を紹介する動画を作成し YouTube で公開。一方 MSR では、海外交流担当者が交代。また、本校の取組が、外務省のウェブサイト「グローカル外交ネット」に掲載。

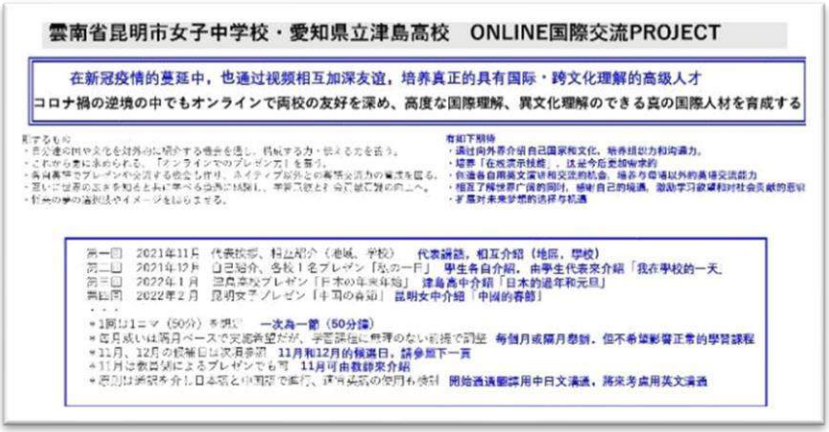


外務省　↑
グローカル
外交ネット



４月になり、バンコクの感染状況がさらに悪化。そこで、他の交流相手を模索。

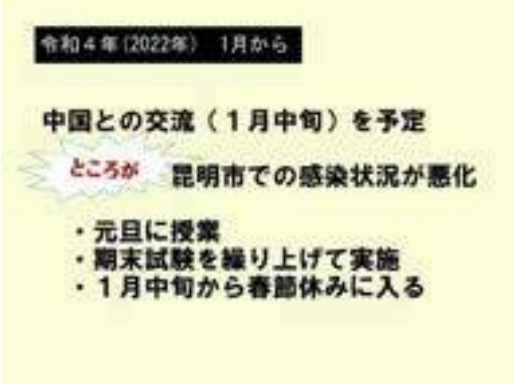


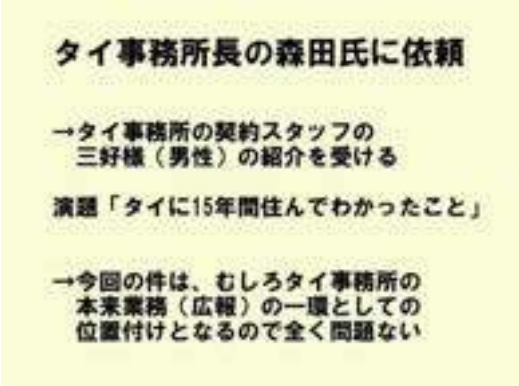


↑
MSR、JICA タイ事務所、
中国・昆明　５枚

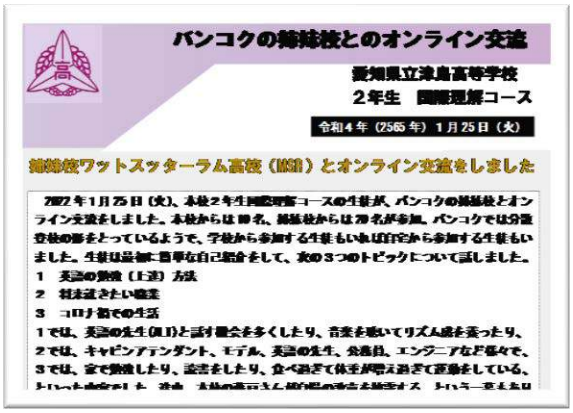
4　新型コロナウイルス感染症とともに【令和４年(2022 年)１月から】

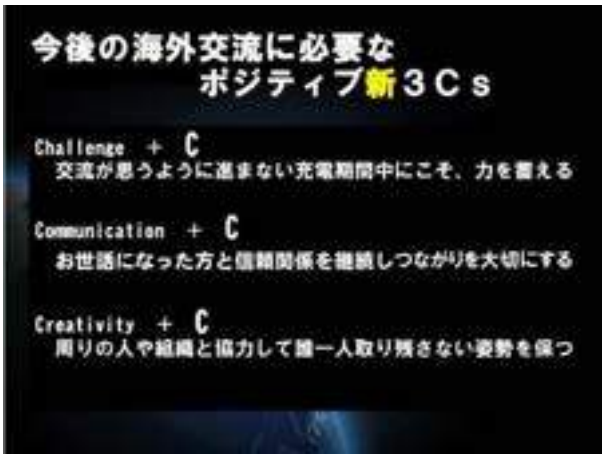
１月中旬に中国との３回目の交流を予定していたが、中国側の感染状況悪化で中止。そこで JICA タイ事務所に再交流を依頼し、日本人スタッフによる講座を受講。





すると翌週には MSR から突然交流依頼あり。さらに５月には中国、７月には新たに JICA パキスタン事務所と交流が可能に。３Ｃｓが第２フェーズへと深化。





【今後の課題】

・生徒間での交流にどう踏み切るか
（現地交流を行う準備として有効）

・どのように管理・運営していくか

E-mail、LINE、WeChat（微信）、
ビデオ配信など

JICA タイ事務所、　→
MSR、中国・昆明等　４枚

「目指せ、真の国際人!! 我ら、世界の架け橋とならん!! 盛岡の魅力を世界に発信!!」
～コロナ禍でも地元貢献を意識した二刀流（従来型&オンライン）国際交流活動～

岩手県（私立）岩手中・高等学校
英語科教諭（国際交流部顧問）　田 中　佳 恵

Ⅰ．はじめに

(1)　岩手中・高等学校について

本校は、1926 年（大正 15）の創立以来、96 年の伝統を誇る岩手県内唯一の男子校（普通科）である。盛岡駅から徒歩 10 分、官公庁通りに面した盛岡の中心街に位置し、盛岡の主要な観光名所に囲まれている。盛岡の名勝「石割桜」にちなんだ不撓不屈、質実剛健の気風を表す本校のスローガン「石桜精神」の涵養が、建学の精神となっている。岩の割れ目から育った石割桜のように、在学中は、学問やスポーツに自己の鍛錬のために耐え抜いて、社会に出て大きな花を咲かせている卒業生が各界に多くいる。先輩と後輩の絆が強い校風である。

（私立）岩手中学校・岩手高等学校	**「石桜精神」現代を創り、未来を創る**	**盛岡の名勝「石割桜」**

(2) 三田義正と新渡戸稲造と旧制岩手中学校（現：岩手中・高等学校）

岩手の若者達の将来を憂い、彼等に教育の必要性を強く感じていた三田義正が、社会貢献として、私費で本校を創設。義正の先見性と先駆けの精神に感銘を受けた新戸部稲造が、1927 年（昭和 2）に自ら来校し、当時の岩高生達に、「先駆けの精神 Pioneer Spirits で突き進め！」とエールを贈った。これを本部活の活動モットーとした。

 写真提供：盛岡市先人記念館	**岩手中・高等学校創立者：三田 義正** 盛岡を代表する先人の一人 盛岡の近代街づくりのパイオニア 実業家、政治家、盛岡に初の映画館を開業 旧制岩手中学校の創設者	 写真提供：盛岡市先人記念館	**新渡戸 稲造（盛岡市出身）** 初代国際連盟事務次長 “BUSHIDO THE SOUL of Japan”著者 日本で初めての農学博士、教育者、 台湾総督府民生部殖産局長　など
三田 義正の願い **「日本の将来を担う若者の育成は教育にあり。** **岩手からも将来、社会に役立つ有為の人材を生み出そう」**		**新渡戸 稲造のメッセージ** **「先駆けの精神 Pioneer Spirits」（1927）** **＝　岩手高校国際交流部活動モットー（2013～）**	

(3) 国際交流部について　～盛岡を代表する二人の先人達の教えから～

岩手中・高校国際交流部活動モットー：　「先駆けの精神 Pioneer Spirits」
「目指せ、真の国際人!! 我ら、世界の架け橋とならん!!」～郷土の魅力を世界に発信!!～

本部活が考える「真の国際人」とは、自分が住む街や国に誇りを持ち、自分の住む国や地域の歴史や伝統文化を学んだ上で、他国の人々と世界平和を実現しようと行動できる人、さらに自分の国や地域を客観的に見ることができる人である。 岩手や盛岡を自分達から盛り上げていき、「世界の架け橋」となり、「志」をもって邁進している。時代の状況とニーズに合わせながら、様々な手段で工夫を凝らしながら活動を継続している。

(4)「郷土（岩手・盛岡）の魅力を世界に発信する」活動にこだわる理由（顧問の意図）

近代盛岡の街づくりのパイオニアである本校創設者の三田義正は、盛岡を代表する先人の一人である。今でいうSDGsのさまざまなゴールの実践者である。義正が創設した学校の生徒であることに誇りを持ってほしい。

最近は、他部、クラス、全校生徒を巻き込んで活動することもある。本校の歴史を知ることにより愛校心を抱き、自分達の住む地域の魅力を知ることにより郷土愛を育ませたい。そして自分の住む日本を愛し、「真の国際人」を目指してもらいたい。うわべだけの交流ではなく本質的なことを知った上で、世界中の人達と交流してほしい。

2．コロナ禍前(対面的な活動)、コロナ禍中(SNS活用)、現在の国際交流活動(オンライン導入)

コロナ禍前は、以下の（1）のような多岐にわたる活動をおこなっていた。街中を歩き回り、気になることはすぐに自分達の目で確認しに出掛ける、関係者に訪問取材など、対面的な活動を積極的におこなうことができた。

(1) コロナ禍前（2014～2020）地域創生を目指し、地元の魅力を世界に発信する活動

[A] 英語学習活動　＊岩手県国際交流協会主催の外国人との交流会（月１回）参加　＊英検、TOEIC Bridge受験

[B] 外国語養成講座参加　＊初級英語通訳講座研修　＊外国人災害時英語ボランティア養成講座

[C] 行政主催の国際交流イベントのボランティアスタッフ　※2020,2021年は、コロナでイベント中止

＊盛岡さんさ踊り台湾観光政府舞踊団パレードエスコート(2016～2019)　盛岡市主催

＊盛岡さんさ踊り祭り外国人案内所サポート（2017，2018，2019）盛岡商工会議所主催

[D] 外国人中高校生との対面交流（スクールツアー、部活動巡り、盛岡市内案内、多文化相互体験会など）

＊マレーシア高校生来校（2016，2017）　＊アメリカ人中学生来校(2018)

[E] 校外取材＆探究活動

観光名所、神社・寺院、歴史的建造物、記念館、名店、工房、石碑・銅像、特産物・地酒、グルメ、伝説、

多言語Map情報リテラシー、歴史文化研究、マチナカ設置状況調査（多言語標示・看板、ISO規格ピクトラム、Free-Wifi）

[F] 国内外で活躍した岩手出身の先人の功績や作品の取材＆探究活動

新渡戸稲造、後藤新平、三田定則、伊能嘉矩、葛西萬司、鹿島精一、原敬、三田義正、米内光政、石川啄木、金田一京介、宮澤賢治、野村胡堂、村上昭夫、高橋克彦　など

[G] 地方創生を目指し地元に貢献する活動―多言語翻訳＆寄贈活動

＊岩手特産物商品説明日/英カード制作→ショッピングセンター内の産直ショップに寄贈(2016)（南部鉄器、盛岡三大麺など）

＊地元の老舗のメニューを多言語翻訳(日・英・中)→各店舗に寄贈

・白龍の盛岡じゃじゃ麺（2019）　・関口菓子舗の盛岡駄菓子（2020）　・福田パン（2021）

[H] 地元企業（盛岡老舗５大百貨店連合会Morioka 5 Stars）との地域創生活動

＊「もりおかマチ歩きMAP 2019」の英語版を制作（翻訳期間：約10ケ月）(2019-2020)

QR code からGoogle Mapsと 連動 "The MORIOKA MACHIARUKI WALKING MAP" 英語版完成(2020.7)

B3版両面カラー印刷5,000部。百貨店、ホテル、盛岡駅に設置。

盛岡さんさ踊り祭りで外国人観光客に自ら配布。2019ラグビーワールドカップ（岩手県会場）でも配布された。

The MORIOKA MACHIARUKI WALKING MAP　Connect with Google Maps with each QR code

[I] 活動報告で発信活動プレゼンテーション(対面型発信活動)

＊全国国際教育研究大会生徒研究発表(2015, 2017, 2018 年度出場)

・2015 年度 第 52 回千葉大会「国際協力奨励賞」

タイトル：「目指せ、Inazo!! 我ら世界の架け橋とならん!! 」

内容：新渡戸稲造が書いた武士道精神と自分達の国際交流活動の関係について、真の国際人とは？

・2017 年度 第 54 回岩手大会「国際協力機構東北支部長 JICA 賞」

タイトル：「目指せ、真の国際人!! 郷土の先人 Respect!! 我ら世界の架け橋とならん!!」

内容：台湾で活躍した岩手県出身の先人達と地域創生を目指しインバウンドを意識した活動

・2018 年度 第 55 回東京大会「国際交流基金賞」

タイトル：「目指せ、真の国際人!! 我ら世界の架け橋とならん!!」

内容：地方都市におけるインバウンドの現状と多文化共生の今後のあり方

＊2016 年度 AIU 米国高校生国際交流プログラム　日本代表高校生大使として米国高校生に「武士道精神」を伝える

＊盛岡市内の民間イベントで活動報告プレゼンテーション・パネル展示

・盛岡青年会議所(2017)　・INAZO サミット（2018）　・盛岡台湾 Happy Fes（2020）など

*岩手県高文連主催高校生ユネスコ研究大会出場(毎年)　*本校文化祭(石桜祭)でステージ研究発表＆活動報告展示(毎年)

[J] SNS 発信活動

・公式 Facebook で活動報告

・公式 YouTube チャンネル研究発表の動画配信

(2) コロナ禍初期迷走期（2020 春～2021 春）「SNS 発信活動―動画制作」公式 YouTube

コロナの影響で、様々なイベントが中止となり、学校外での活動が制限され、対面式の国際交流活動[A][B][C]が全くできなくなった。ネット検索や書籍を通じての研究が主となり、学校外での取材は市内のコロナの感染状況を見ながら、学校周辺または、人がいない場所での活動に制限した。発表は SNS を利用。英語と日本語で原稿を作成し、撮影・アフレコ・編集をおこない、YouTube 公式チャンネルで配信。

＊岩手中・高等学校国際交流部 公式 YouTube 動画

・盛岡さんさ踊りと岩手の名前の由来となる「鬼の手形伝説（英語版）」

・コロナ感染予防手洗い動画「岩手高校の校歌に合わせて Let's Wash Your Hands!　（日本語版）」

・SDGs 普及活動「身近に気軽にできる SDGs（日本語版）」

・「盛岡台湾 Happy Fes（日本語版）」公開プレゼンの様子　　etc…

＊盛岡ご当地検定「盛岡もの識り検定問題」Power Point で一問一答クイズ制作(2021 冬)

コロナの終息する未来が見えない状況の中、クイズを作ったとしても、「一体どこで披露するのか、披露できる日が来るのか」と、意気消沈していく様子が伺われるようになり、ピンチ状態に陥ってしまった。

（3）現在の国際交流活動(オンライン国際交流の導入)（2021 初夏～現在）～ハイブリット・二刀流～

①台湾桃園高級中等学校との出会い

これまで継続で研究していたことが活かされる奇跡が起きた。2017 年度の部員が全国大会で発表した「台湾で活躍した岩手の先人達」の研究を改良し、2020 年度の後輩部員達が、地元のイベント（盛岡台湾 Happy Fes）で再現。運営事務局より、台湾桃園高級中等学校とのオンライン交流の打診があった。コロナ感染リスクを回避するため、2020 年より修学旅行は中止、県高総体も部活により出場できない状態で、高校生活が充実していないようだった。桃園高校とのオンライン交流は、そんな矢先のビッグチャンスだった。国際交流部が生徒会を誘い、タッグを組んで企画した。全校生徒から有志を募り、予想を超える４２名が集結。初めてのオンライン交流であるにもかかわらず、事前準備、セッティング、進行など文化祭と同じくらい大がかりになった。交流の参加有無にかかわらず、学校紹介ムービー制作には、全部活が出演協力。学校全体が盛り上がった。交流は、岩手高校側は体育館から、台湾桃園高校側は各家庭からアクセス。約２時間の交流で緊張感が漂った。それ以降、クラス単位、部活単位など、様々な生徒が関わるようにし、より親密な交流を深めている。

2021.06 第１回　国際交流部企画に生徒会が協力　全校生徒からの有志（42 名）　「学校紹介・お菓子交流」
プレ交流として自国のお菓子と記念品を共に交換（国際郵便）→交流中にお菓子を互いに試食し感想を述べ合う。

2021.11 第２回 & 2021.12.第３回　国際交流部企画に高１クラスが協力(23 名)「台湾・盛岡の観光紹介」

2022.05.第４回　国際交流部（新入部員含む５名）　「盛岡さんさ踊りについてのプレゼン＆クイズ出題」
台湾の生徒達とスクリーン越しに「盛岡さんさ踊り」を一緒に踊る。

②オンライン国際交流の目標・ねらい

＊先駆けの精神 Pioneer Spirits で、新しい形の国際交流「オンライン交流」への挑戦。
＊これまで培ってきた研究を活かし、岩手・盛岡の魅力を世界に発信！
＊台湾で活躍した岩手の先人達について現在の台湾高校生の認知度を調査したい。
＊国際交流部の枠を超え、岩手高校全校生徒を巻き込み、国際交流の楽しさを共有したい。
＊コロナ禍でも、学校全体が前向きになりみんなで意識を高め合う。学習意欲も前向きになる。英語力 UP！
＊同じ高校生と話すことにより刺激を受け、文化や考えの違いにも気づかせる。（多文化理解・多様性の尊重）
＊自分の住む地域や国の魅力を再確認するだけでなく、交流相手の地域や文化情報は、交流前に必ず調べ、より深い相互交流と継続的な交流を図り、「真の国際人」を目指す。

③その他のオンライン活用実績

＊岩手県国際交流協会主催「オンライン Chat Land English Time(無料)」参加（月１回開催）

＊インド人高校生とのオンライン交流（高１有志４名参加―国際交流部員１名含む）(2021.8)

＊盛岡さんさ de 国際交流×SDGs 研究発表　国際交流部員５名（2022.6/18~ 8/4）

＊部活内で Zoom や Google Meet で話し合い。Breakout Rooms の活用。

④オンライン国際交流の成果

国際交流部のかつての部員達が始めた研究と活動が、時代と部活の枠を超え、学年、クラス、学校全体に拡大し、影響を及ぼすことができた。このコロナ渦、このようなオンラインという形で盛岡の魅力を世界に発信できた。岩高生がパートナーシップで取り組み、あらゆる分野の勉強をもっと頑張ろうという意識向上にも繋がった。参加者は盛岡や台湾のことを自主的に調べた。テレビやネットニュースでも台湾情勢が気になるようになった。

また、地元盛岡にも魅力に気がついた。将来は地方創生の仕事を目指し、盛岡の産業を改善する職業に就くための進路を目標にした部員もいた。オンライン交流は無限大。

交流後、台湾の生徒達と Instagram や Line で友達になり、個人的にゲームで交流をしている生徒もいる。SNS の普及により、「国際交流」と身構えをせず、気軽に交流できる時代がやってきたと感じた。他国を身近に感じ、同じ年齢同士がいつでも楽しく、生徒の好きな話題で交流できる良い点がある。しかし、SNS を通じて交流する上で、今後気をつけなくてはいけないことは、国際交流における情報モラルの教育だと感じた。

３．今後の展開や展望

コロナ禍でオンライン交流はますます活発になるだろう。特に 2022 年度入学の高校一年生は、一人一台パソコンを所有している。以前より自由にネットで検索し PowerPoint でプレゼン資料を作れる環境だ。また、動画はスマホでも気軽に作れるようだ。調べ物はネットでもできる時代だが、やはり、実際に自分達の足で盛岡のマチナカを歩き、地元の人達と交流を深めながら取材と研究することを怠ってはいけない。従来型の活動とオンライン交流とハイブリット型（二刀流）で、コロナの状況を判断しながら活動は継続していく。

コロナ終息後は、桃園高の皆さんに直接会ってみたい。盛岡を案内したり、台湾にも行ったり、「世界の架け橋」を渡る新しい挑戦をしてみたい。情勢により手段は違うかもしれないが、岩手中・高等学校国際交流部の「真の国際人を目指し先駆けの精神 Pioneer Spirits で郷土の魅力を世界に発信し地元に貢献する」信念は揺るがない。

４．最後に

歴代の部員達と苦楽を共にし「真の国際人」を目指すため、国際交流にかけた大切な思い出を胸に抱きながら、10 年間の集大成を先駆けの精神 Pioneer Spirits で発表したいと思う。

記念講演

記念講演

「感染症が世界を滅ぼす？　Emerging Disease　新興感染症とは。」

講師：仲佐　保　医師

＜講師紹介＞

広島大学医学部卒業後より、国際保健医療協力に興味を持ち、20 以上の国々で人道援助や国際医療協力に従事されている。国際医療協力の貢献に対しては、医療功労賞を授与された。近年では、コンゴ民主共和国でのエボラ出血熱、国内における新型コロナウイルス対策にも貢献され、現在は、国際保健 NPO であるシェア＝国際保健協力市民の会の共同代表を勤められている。

＜講演要旨＞

今、新型コロナウイルス感染症が世界を席巻しています。まさか、このようなウイルスが 2 年以上も人類を苦しめることは想定されていませんでした。かつて、カビがつくりだすペニシリンという抗生物質が発見されてからは、人々を苦しめられて来た細菌による感染症の治療が可能となりました。1980 年代には医学界においても、感染症は抗生物質により制圧可能であり、今後の一番大きな問題は「がん対策」となりました。一方、途上国では、様々な感染症のため、多くの子どもたちが亡くなっているのも事実でした。

1990 年代になり、世界で大きな問題となったのは、HIV/エイズでした。若い人でも下痢や肺炎を起こして、次第にやせていき、次々と死んでしまいます。原因不明の致死的な病気として、このエイズ（AIDS）のために 20 世紀末には人類は滅びるのではとも言われました。原因は、細菌ではなく、ウイルスであり、このウイルスにより、人間の免疫をつかさどる細胞が障害を受け、様々な感染症にかかりやすくなり、ついには死んでしまうという病気であることがわかりました。HIV/エイズは、性病であったころから、人々への感染を防ぐことはなかなか困難であり、世界中に広まってしまいました。当初は、治療薬はなく、致死率 100%と言われましたが、10 年ほどの経過の中で、完全に治すことはできないが、一日 1 回の薬を飲むことにより、普通の生活ができるようになっています。

2000 年代になると、SARS、MERS、鳥インフルエンザ、エボラ出血熱というようなウイルス感染症が世界各地で流行を起こすこととなりました。HIV/エイズも含め、これらのように新たに起こる感染症を新興感染症：Emerging Disease と呼ばれますが、毎年、新たな感染症を起こしています。

今回の新型コロナウイルス感染症：COVID19 は、典型的な新興感染症であり、世界の人々を苦しめています。これまでの感染症と異なる点は、①死亡率があまり高くない、②遺伝子が早期に変化し、新しい変異株が出現し、人々に感染しやすい、③症状がない時にも人に感染するという特徴があり、とても厄介なものです。

新興感染症は、どうしておこってくるのか。これには、人類（ヒト）そのものが原因とも

言われています。感染症により、人類は滅ぼされてしまうのでしょうか。長く、国際医療協力に携わった経験からの話をしてみたいと思います。

来賓・大会役員・事務局名簿

１　来賓（敬称略）

外務省国際協力局　審議官　日下部　英紀

文部科学省　初等中等教育局教育課程課　教科調査官　情報教育・外国語教育課　教科調査官

国立教育政策研究所　教育課程研究センター　教育課程調査官・学力調査官

富髙　雅代

独立行政法人国際協力機構　JICA 地球ひろば所長　竹田　幸子

独立行政法人国際交流基金　広報部部長　高橋　力丸

一般財団法人日本国際協力センター（JICE）　総務部 総務・企画課長　増野　雄一

東京都教育委員会

２　大会役員および事務局

大会参与　中里　真一（全国国際教育研究協議会会長・東京都立北豊島工業高等学校長）

大会会長　西野　　孝（関東甲信越静地区国際教育研究協議会会長・千葉県立流山おおたかの森高等学校長）

大会副会長　川村　始子（関東甲信越静地区国際教育研究協議会副会長・茨城県立竹園高等学校長）

吉成　　卓（関東甲信越静地区国際教育研究協議会理事・栃木県立黒磯南高校長）

栗山　嘉章（関東甲信越静地区国際教育研究協議会理事・長野県木曽青峰高等学校長）

江森　　忍（関東甲信越静地区国際教育研究協議会理事・東京都立農産高等学校長）

大会理事　西尾　匡道（関東甲信越静地区国際教育研究協議会監事・千葉県立佐原白楊高等学校長）

中村　淳一（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会副会長・柏市立柏高等学校長）

田中　祐之（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会副会長・千葉県立松戸南高等学校教頭）

遠山　宗利（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会監事・千葉県立薬園台高等学校教頭）

３　大会事務局　高橋　祐子（茨城県高等学校国際教育研究協議会事務局長・茨城県立水海道第一高等学校）

水沼　玲子（栃木県高等学校国際教育研究協議会事務局長・栃木県立黒磯南高等学校）

岩﨑　　史（長野県高等学校国際教育研究協議会事務局長・長野県木曽青峰高等学校）

吉野　翔子（東京都国際教育研究協議会事務局長・東京都立浅草高等学校）

中村　俊佑（東京都国際教育研究協議会事務局・全国国際教育研究協議会事務局長・東京都立五日市高等学校）

高島 みゆき（東京都国際教育研究協議会事務局・全国国際教育研究協議会副事務局長・東京都立砂川高等学校）

竹山　哲司（東京都国際教育研究協議会事務局・全国国際教育研究協議会副事務局長・東京都立六郷工科高等学校）

林　　真代（東京都国際教育研究協議会事務局・
全国国際教育研究協議会副事務局長・
東京都立永山高等学校）
坂本　美香（東京都国際教育研究協議会事務局・
全国国際教育研究協議会副事務局長・
東京都立科学技術高等学校）
石野　明子（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
松戸市立松戸高等学校）
宇根　直子（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
千葉県立成田国際高等学校）
平山　幸子（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
銚子市立銚子高等学校）
中野　　仁（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
千葉県立印旛明誠高等学校）
及川　千裕（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
千葉県立匝瑳高等学校）
坂本　樹哉（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
千葉県立銚子高等学校）
佐々木 綾香（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
千葉県立八千代高等学校）
坂本　春華（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
千葉県立生浜高等学校）
池田　　勉（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
千葉県立流山おおたかの森高等学校）
今沢　　亘（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会理事・
千葉県立流山おおたかの森高等学校）
木村　早織（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会加盟校職員・
柏市立柏高等学校）
武田　真美（千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会加盟校職員・
柏市立柏高等学校）
長谷川 聡子（研究協議会加盟校職員・東京都立南葛飾高等学校）
森塚　　創（研究協議会加盟校職員・東京都立五日市高等学校）
渋下　美香（研究協議会加盟校職員・東京都立砂川高等学校）
大山　峰弘（全国国際教育研究協議会常務理事・茨城県立水戸第二高等学校）
丸本　照美（茨城県高等学校国際教育研究協議会理事・
茨城県立取手第一高等学校）
須藤　啓之（栃木県高等学校国際教育研究協議会理事・栃木県立黒磯南高等学校）
高田 さやか（栃木県高等学校国際教育研究協議会理事・栃木県立黒磯南高等学校）
三澤　隆文（長野県高等学校国際教育研究協議会事務局幹事・
長野県木曽青峰高等学校）

5　大会事務局長　玉置　　瞬（関東甲信越静地区国際教育研究協議会事務局長・
千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会事務局長・
柏市立柏高等学校）

MEMO

協　賛　団　体

神田外語学院
神田外語大学

KIFL×KUIS

あなたの街に伺います！

合同進路相談会

東日本9都市で開催！
2022.8.25-9.15
15:00-18:30

詳細はこちら

外国語や国際関係の分野に進みたい、将来は語学を使って活躍したい、世界を相手に仕事をしたい、憧れの客室乗務員になりたい、人気の旅行業界で働きたい、海外に憧れがある、国際教養を学びたい、英語は好きだけど将来何をしたいかわからないと思っている高校生・受験生を応援するイベントを、東日本9都市にて開催します。
高校生・受験生のみならず、保護者の方、高校の先生方もぜひご来場ください。

郡山	仙台	新潟	宇都宮	水戸	甲府	静岡	長野	高崎
開催日 開催時間	郡山 8月25日(木) 15:00～18:30	仙台 8月26日(金) 15:00～18:30	新潟 8月30日(火) 15:00～18:30	宇都宮 9月1日(木) 15:00～18:30	水戸 9月5日(月) 15:00～18:30	甲府 9月7日(水) 15:00～18:30	静岡 9月8日(木) 15:00～18:30	長野 9月14日(水) 15:00～18:30	高崎 9月15日(木) 15:00～18:30
開催会場 受付	郡山商工会議所 6階	トラストシティカンファレンス 仙台 仙台トラストタワー5階	駅前大オフィス社会議室 新潟マルカビル8階	TKPガーデンシティ宇都宮 ノハロ・チル(宇都宮駅前)10階	TKPスター貸会議室水戸駅前 水戸駅前証券ビル5階	甲府商工会議所 20会議室(12階)	静岡商工会議所 静岡市葵区紺屋町	JA長野県ビル 12階会議室	高崎商工会議ビル 2階ホール会議室

概要説明・入試制度説明、進路相談コーナー

概要説明・入試制度説明

神田外語学院（神田外語学院(東京・神田)）と、神田外語大学（千葉・幕張）の学校概要と入試制度についてご説明します。学科・専攻などの紹介や、取得できる資格、見聞のカリキュラムや留学制度、卒業後の進路についてご説明します。また神田外語ならではの入試制度制度や、編入学制度についてもご紹介します。

進路相談・資料配布コーナー

会場内にはティーラウンジ形式の進路相談コーナーを用意して、皆さんをお待ちしています。また神田外語学院・大学の資料も無料で配布していますので、ぜひお持ち帰りください。

採用復活！ホスピタリティ業界！

新型コロナウイルス感染拡大で大打撃を受けた観光・航空業界のいまを伝えるべく、専門学校の国際エアライン科・国際観光科の教員も相談します。業界がいまどうなっているのか、将来の仕事について詳しくご説明します。

在学生・卒業生と話そう！

学院・大学の説明員以外にも在学生や卒業生もスタッフとして参加します。海外に学んでいる留学生からキャンパスライフや学院での学び・サークル活動など、生の声を聞くことができます！

専門学校の
学院学校
神田外語学院

2年制課程　英語専攻科、アジア/ヨーロッパ言語科（フランス語コース、スペイン語コース、中国語コース、韓国語コース、インドネシア語コース、ベトナム語コース、タイ語コース）、デジタルコミュニケーション科（ゲーム・アニメ専攻）、国際ビジネスキャリア科、先進英語教育科、国際エアライン科、国際観光科、国際ホテル科、グローバルコミュニケーション科（アントレプレナーコース、国際観光コース）、留学科（海外大学3年次編入コース）
1年制課程　英語教育研究科

専門科大学・
大学校
神田外語大学

学部・学科　（外国語学部）英米語学科、アジア言語学科（中国語専攻、韓国語専攻、インドネシア語専攻、ベトナム語専攻、タイ語専攻）、イベロアメリカ言語学科（スペイン語専攻、ブラジル・ポルトガル語専攻）、国際コミュニケーション学科（国際コミュニケーション専攻、国際ビジネスキャリア専攻）
（グローバル・リベラルアーツ学部）グローバル・リベラルアーツ学科
大学院　言語科学研究科
修士課程　英語教育専攻、MA TESOL Program
日本語教育専攻、日本語教育コース、日本語教育コース
博士課程　言語科学専攻

教育関係者の皆様へ

国際理解教育／開発教育のための プログラム案内

1 JICA地球ひろば訪問

2 国際協力出前講座

3 JICA国際協力エッセイコンテスト

4 「世界の民族のために」プログラム

5 教師海外研修（JICA国内機関主催）

6 国際理解教育／開発教育特別指導者研修（JICA地球ひろば主催）

7 JICA海外協力隊（現職教員特別参加制度）

8 国際理解教育／開発教育のための教材

独立行政法人 国際協力機構

JICA地球ひろば(東京・市ヶ谷)で、世界を体験!

1 JICA地球ひろば訪問

入場無料
団体訪問は事前予約

活用法

- 社会科見学
- 総合学習
- 修学旅行
- テーマ学習
- 校外学習 など

内容

ご希望のテーマや内容に応じて、プログラムの組み立てます!

- 体験ゾーンの見学
- JICAと国際協力について
- 世界のいろいろな国を知ってみよう
- 校外学習
  ・テーマ学習のお手伝い
- 日本をみつめなおす内容

※所要時間は調整に時間をください。

対象

小学校高学年～一般

人数

1名～　名程度(応相談)
※ご希望のプログラムによります

実施日

通年　月曜日～日曜日
※1～3日は、JICAセンターの休館日のため、ご利用不可

費用

無料

JICA地球ひろばでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える問題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、途上国での活動体験や国際協力専門家を使った参加型学習(グループワーク)を組み合わせたプログラムを実施しています。
修学旅行や社会科見学、総合学習等で、ぜひご利用ください!

プログラム例 120分
※プログラムの内容の詳細については、下記に記載ください。

40分 ・体験ゾーン見学
(探検シートをもとに館内を見学)

※くらしの国際協力を体験

20分 ・JICAの事業や日本の国際協力について説明

50分 ・国際協力(青年海外協力隊等)の体験談または参加型学習(グループワーク)

10分 アンケート記入

※体験ゾーンの展示は6ヶ月に1回程度更新されます。

申込方法

JICA地球ひろば訪問

1ヶ月前までに電話で予約

平日9時～17時30分、土曜日9時～17時30分
JICA地球ひろばホームページの「訪問カレンダー」で確認できます。
通話料がかからないフリーダイヤル
0120-78-7278(TEL:03-3269-3090)

or

資料請求の送付

JICA地球ひろばホームページから
www.jica.go.jp/hiroba/ JICA地球ひろば 検索 検索

FAXまたはEメールで請求してください。
FAX:03-3269-3419 chikyuhiroba@jica.go.jp

ランチ 800円程度～
国際的ビュッフェなど、
ご用途に応じます。

J's Cafe　03-3269-2911

気軽に食文化で世界を感じる!

ランチタイムに開発途上国の伝統的な食事を通して、世界の食文化に触れる機会を提供しています。また、団体訪問と組み合わせたお食事等のご予約もお承っております。途上国で生産されたフェアトレードの商品も販売しています。

【営業時間】平日 8:11:30～14:00
【ランチタイム】11:30～14:00
【休業日】日曜日、祝日、年末年始
【土曜日の営業については HP をご確認下さい】

JICA図書館

図書や雑誌で世界を知る!

国際協力についての図書や雑誌、JICAボランティアの報告書やJICA刊行物があります。どなたでもご利用いただけますが貸出はしておりませんのでご了承ください。

【閲覧時間】事前予約制
【休館日】土日祝日、館内整理日
(各月の最終平日)、年末年始

●名古屋と札幌にも地球ひろばはあります!

いつもの教室で、世界を体験してきた講師と学ぶ!

2 国際協力出前講座

活用法

- 総合的な学習の時間
- 道徳
- キャリア教育
- テーマ学習
- 教員研修・PTA講演会　など

内容

ご希望のテーマや内容に応じて、講師を紹介します!

- 開発途上国の生活や文化を知る
- 国際協力の現場で活躍する人々と交流する
- 国際協力を通して自分たちの生き方を考える
- [illegible]

対象

小学生～一般

実施日・場所

実施日、時間ともご希望により調整可能です。オンラインでの実施は要相談

費用

講師への謝金と交通費のご負担をお願いします。謝金の目安は講師1人1時間あたりおよそ5,000円です。詳しくはご相談ください。

開発途上国の現場で国際協力に携わったJICAの関係者を講師として学校や地域などに派遣し、開発教育、国際理解教育に役立てていただいています。現場で活躍した人材だからこその貴重な体験談をお届けし、受講者の疑問にお答えします。

講座の実施例

※講師や内容はご希望に応じて変更します。

対象	教科・テーマ	講師(派遣国・地域)
小学校5年生 35人	総合的な学習の時間「世界の子どもたちと学校に行きたい!」	ボリビア 青少年活動
小学校6年生 54人	社会科(歴史)・総合的な学習「地球の歴史を学ぶ!」	フィジー 総合教育
中学校全校生徒 250人	道徳「当たり前って何?世界で今起きていること!」	マラウィ エイズ啓発活動
高校1年生 100人	進路指導(キャリア教育)「夢に向かって!これからの生き方を考える!」	ケニア 受診相談
高校2年生 31人	歴史「世界で活躍する日米人と私たちにできること」	バングラデシュ 村落開発普及員
看護大学2年生 40人	開発協力が「国際協力の現場・体験談!」	ラオス 教師
一般向け 50人	市民講座「めざせ!地球市民(海外協力隊から見た世界)」	エジプト PCインストラクター

※講師が決定したら、講座の内容や他現でできる国際協力について講師と直接お合わせをお願いします。

申込方法

国際協力出前講座

1ヶ月前までに申込み　全国のJICA国内拠点、または各県の国際協力推進員(JICAデスク)にお問合せください。

申込書の送付　申込書は JICA国内拠点ホームページから JICA 国内拠点 検索 FAX または Eメールで送付してください。

JICA海外協力隊は世界70カ国以上 100以上の分野で活動しています!

国際協力や開発途上国の文化や暮らしについてはもちろんのこと、ご希望のテーマに合わせた講座内容を組み立てます。現地での実体験にもとづいた話が好評です!

命　環境　人権　食育　道徳　スポーツ　文化　仕事　進路

世界のことを考えるきっかけに！　（活用法）□夏休みの課題　□作文宿題・小論文対策　□授業の時間活動　□出前講座の事業企画

3 JICA国際協力エッセイコンテスト

対　象：小学生・中学生・高校生
募集期間：6月～3月中旬　応募先：JICA

学校で習ったことやニュースで聞いたこと、
自分の体験から感じたことをエッセイで伝えよう！
JICAでは、開発途上国の現状や国際協力の必要性について理解を深め、自分たち一人一人に何ができるのかを考えることを目的に、中学生・高校生を対象としたエッセイコンテストを毎年実施しています。上位入賞者には、途上国で国際協力の現場を視察したり、現地での生活が体験できる海外研修が贈られます。夏休みの宿題や課外授業としてもご活用ください。

協　賛：外務省、文部科学省、各都道府県教育委員会、
日本私立中学高等学校連合会など

詳しくはコチラ　JICA　エッセイコンテスト　検索

何かをやってみたい！と思ったら…

4 「世界の笑顔のために」プログラム

対　象：高校生、大学生、社会人、どなたでも
募集期間：オンライン　春期：3月から5月頃
秋期：10月から11月頃

「国際協力をしたい！でも、何ができるのだろう？」
そんな想いに応えるプログラムがあります。
開発途上国で必要とされている教育、福祉、スポーツ、文化などの活動内容を提供していただき、JICAが派遣中のJICA海外協力隊やJICA在外事務所を通じて世界各地へ届けます。
個人での参加はもちろん、学校やクラス単位でもご応募いただけます。

JICAのボランティアとなることを目的から離れた場所で、海外の活動の知識を深めることができるようにしました

詳しくはコチラ　JICA 世界の笑顔　検索

実際に現地を見て学ぶ

5 教師海外研修（JICA 国内機関主催）

国際理解教育・開発教育に関心を持つ先生を対象に、10日前後で開発途上国を訪問し研修を行います。途上国が置かれている現状や国際協力の現場、諸外国と日本との関係に対する理解を深め、その経験をもとにした教材作成や授業実践の報告会を含むプログラムです。毎年全国で約100名の教師が世界各国で研修を受けています。

協　賛：文部科学省、外務省、各都道府県・政令指定都市教育委員会など

海外研修：3月中旬～10月頃
※研修内容の検討・選抜と事前研修の実施を行います。
※年度によっては国内研修で実施する場合もあります。

詳しくはコチラ　JICA　教師海外研修　検索

さらに学ぶ

6 国際理解教育／開発教育指導者研修（JICA 地球ひろば主催）

JICA地球ひろばでは、教師海外研修の参加者などを主な対象者とし、国際理解教育・開発教育の更なる実践や国内での自主的な研修を目的とした講座を実施しています。開発教育・国際理解教育への興味・関心の高い全国の先生方を対象に、専門家をアドバイザーとして、年に2回（夏期・冬期）国内研修を実施しています。

協　賛：日本国際理解教育委員会

過年度テーマ「SDGs国際協力」と「多文化共生」
教育課程編成を踏まえ、授業づくりを考える上での留意ポイントを学ぶとともに、授業で活用できる様々な事例・教材や地球ひろばの資源を活用した事前・事後学習の事例にも触れました。また、多くの学校現場の方々の参考になるよう、"汎用性"を意識した授業の指導案づくりを共に考えました。

詳しくはコチラ　国際理解教育　開発教育指導者研修　検索

教員経験を活かして世界で活躍する！

7 JICA 海外協力隊（現職教員特別参加制度）

学校の教員が身分を保持したまま、JICA 海外協力隊へ参加するための制度で、派遣期間と職務をあわせて2年間となります。
過年度募集枠のみ募集しています。

協　力　文部科学省

詳しくはコチラ　JICA海外協力隊　現職教員　検索

教材で学びを広げ、理解を深める!

8 国際理解教育／開発教育のための教材

JICAでは、国際理解教育や総合的な学習の時間に役立つ教材を作成し、無料で提供しています。
国際協力や地球規模の課題をテーマにした教材を、授業に合わせてご活用ください。

詳しくはコチラ JICA 教材 検索

冊子 教員向け

国際理解教育実践資料集

授業ですぐに活用できるよう、地球の現状や気候変動、環境バランスなどの諸問題に関する最新データ、写真などをまとめました。
アフリカと自分たちのつながりや、世界の環境を考えさせるワーク集も掲載しています。

冊子
小中高生向け

ぼくら地球調査隊

貧困、医療、教育、食料、水問題など、私たちの身近に迫っている地球規模の課題について、マンガを読みながら学ぶことができます。

冊子 小中学生向け

共につくる 私たちの未来

学習指導要領にもある「持続可能な社会の担い手」の育成を見据え、子どもたちの伝える力を育むために、JICA の国際協力を切り口に SDGs の取り組みをまとめた教材です。

映像 中高校生向け

「水と世界」「国際協力」

海外に行ったことのない先生でも世界の問題についての授業ができるように、ルワンダを舞台に作成した映像教材です。
アクティブラーニング用の教材としてもぜひ活用できます。

日本・途上国相互依存度調査

アニメーションムービー 小中学生向け

世界は、キミにつながっている

食べ物の好き嫌いを言っていると、突然お弁当の中身が消えてしまって…。不思議な子ども、ジャイビーと一緒に開発途上国をめぐる旅に出発する、アニメーションムービー。(14分)

冊子／ウェブコンテンツ 小中高生向け

どうなってるの？世界と日本

登場するモデル家族の1日を通じて、私たちの日常と開発途上国とのつながりについて、クイズを交えながら楽しく学ぶことができます。

ムービー 中高生～一般向け

依存大国日本

開発途上国との関わりがなくなったら、私たちの生活は成り立たない!? 知っているようで知らなかった日本とは上国とのつながりに迫ります。(9分)

詳しくはコチラ JICA 相互依存度調査 検索

先生・生徒のお役立ちサイト

JICA では、開発教育・国際理解教育の実践や授業で活用できる教材・素材等、様々な情報を提供する「先生のお役立ちサイト」を立ち上げました。
学校で活用できる「先生・学生向け」JICA 開発教育支援プログラムも紹介しています。
是非、ご利用ください。

https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/index.html

詳しくはコチラ JICA 先生のお役立ち 検索

JICA地球ひろばでは、学校現場における開発教育・国際理解教育の実践を応援するため、開発教育メールマガジンを配信しております。

メール受信ご希望の方は、
1)ご氏名、2)ご所属 を添えて、
こちらまでご連絡ください。
Email：jica-edu@jica.go.jp

JICA地球ひろば・教員向け研修/情報発信運営事務局
一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GIFT）

〒141-0021
東京都品川区上大崎2-5-19 MG品川新町ビル2階
TEL：03-4540-1203 FAX：03-4540-1197

JICA地球ひろば

市民参加協力事業（開発教育支援等）の全国拠点として、国際協力に関心のある皆さまを応援するさまざまな事業を実施しています。

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
代表 03-3269-2911
地球案内デスク 0120-79-7278（フリーダイヤル）
03-3269-9090

※開館時間中での駐車場の時間については対応致しかねます。

● 開館時間

体験ゾーン：平日・土日祝 10:00～18:00
定休日 第1・3日曜日、年末年始
交流ゾーン：9:00～21:30 定休日 年末年始
J's Cafe：平日 11:30～14:00
土日祝 日曜日、祝日、年末年始
（土曜日の営業はHPをご確認下さい）
JICA図書館：事前予約制
定休日 土日祝日、館内整理日（各月最終平日）、年末年始

JICAのメールマガジンに登録しよう！

毎月JICA地球ひろば
JICA地球ひろばや
関東近郊のイベント情報などを
毎週火曜日に配信しています。

Twitter、Facebook、YouTubeでも最新情報を配信中！

●JICAの窓口

北海道から沖縄まで、JICA地球ひろばを含めて全国9拠点が窓口になり、海外からの研修員の受け入れや、国際協力についての市民の皆さまのご要望にお応えします。

●国際協力推進員

国際協力推進員は、「地域のJICA窓口」として、地域国際化協会など地方自治体が実施する国際協力事業の活動拠点に、JICAが配置しています。
あなたに1番近いJICA窓口です。

詳しくはこちら
国際協力推進員 検索

①JICA地球ひろば
②JICA北海道（札幌・帯広）/ほっかいどう地球ひろば
③JICA東北
④JICA二本松
⑤JICA横浜
⑥JICA東京
⑦JICA横浜
⑧JICA静岡
⑨JICA北陸
⑩JICA中部/なごや地球ひろば
⑪JICA関西
⑫JICA中国
⑬JICA四国
⑭JICA九州
⑮JICA沖縄

ほっかいどう地球ひろば	URL https://www.jica.go.jp/sapporo/	TEL 011-896-3421
なごや地球ひろば	URL https://www.jica.go.jp/nagoya-hiroba/	TEL 052-533-0121